

平成22年度アジア食料生産力向上農業人材育成事業
研修効果発現促進事業に関わる
フォローアップ現地調査報告書

平成23年3月

社団法人 国際農業者交流協会

はじめに

社団法人国際農業者交流協会では、昭和58年度（1983年）より農林水産省の政府開発援助（ODA）として、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピンの青年農業者を我が国に招聘して、受入農家での実務研修や農村生活等を体験させることにより、アセアン諸国の農業発展に寄与する事業を実施してきた。この結果、これまで日本での研修を受けた1,400余人の青年農業者は帰国後にそれぞれの国で先導的な農業者として地域の農業振興に貢献していると高い評価を得ている。

当事業ではまた、これらアセアン4カ国の研修修了者に対する現地調査を実施し、研修成果を把握するとともに、更なる向上を支援するためのフォローアップ事業を実施してきた。

本年度はこれまで実施した対象国の順番からフィリピン国を調査対象国とし、東京農業大学名誉教授でおられる鈴木俊先生に調査をお願いし、受入農家の方々にもご参加頂いて、1月末から2月にかけて6日間の現地調査を実施し、調査報告書を鈴木先生に取り纏めて頂いた。

長年アセアン諸国の農村開発や普及教育に携わってこられた鈴木先生の卓越した洞察力に敬意を表すると共に、調査後僅かな期間に、このように素晴らしい報告書を取り纏めて頂いたご尽力に心よりお礼申し上げたい。

また調査に同行頂いた受入農家の方々並びに現地において惜しみない協力を頂いた関係機関各位に感謝する次第である。

併せて、本事業の実施にご指導くださった農林水産省関係者にお礼を申し上げますの次第である。

平成23年3月

社団法人 国際農業者交流協会
理事長 塩飽 二郎

目 次

調査概要	1
調査日程 (1)	
フィリピンの農業概況	3
1. フィリピンの概要 (3)	
2. 農業の概況 (3)	
3. 農業開発と農業研修の必要性 (4)	
現地調査結果	5
1. はじめに (5)	
2. 研修体験者への訪問調査から (5)	
1) カルロス P. ドミンゲス (Carlos P. Dominguez) 氏の事例 (5)	
2) ジェトロ C. ブリジャンテス (Jetro C. Brillantes) 氏の事例 (11)	
3) リッキー J. スルピコ (Ricky J. Sulpico) 氏の事例 (16)	
4) アルバロ C. アルコナーダ (Alvaro C. Arconada) 氏の事例 (22)	
5) エルモル T. ファニータス (Elmor T. Juanitas) 氏の事例 (27)	
6) アルトゥーロ R. アウト (Arturo L. Awat) 氏の事例 (33)	
調査結果並びに提言	38
1. はじめに (38)	
2. 調査結果 (38)	
1) 経営面積の拡大 (38)	
2) 作目の変化・改善 (38)	
3) 生産量と質の変化 (38)	
4) デイリースケジュールの変化・充実 (38)	
5) 研修経験の農業経営への活用状況 (機械の導入、新作物の導入、 作付体系の変化・改善) (39)	
6) 生活規範への影響 (39)	
7) 地域社会への貢献 (39)	
8) 地域社会の研修生への評価 (40)	
9) 本人の研修事業に対する評価と要望 (40)	
3. 提言	40

調査概要

1) 調査の目的

本事業は、これまで、(社)国際農業者交流協会が実施してきた途上国の農村青年のわが国における研修事業アセアン研修プログラムを受講した青年が、帰国後どのような活動を行っているかを把握し、その結果本研修事業が相手国の農業や地域の発展にどのように役立っているか、また、今後におけるより効果的な研修事業実施のための改善に必要な資料作成を目的として実施したのもである。

本年は特にフィリピンを取り上げ、同国農村青年の日本における研修が、渡航前と比較して帰国後の農業経営・地域開発にどのような影響をもたらしたか、また彼らが受講した研修事業に対する評価、並びに今後におけるより効果的な研修に繋がる提言を模索すべく纏めたものである。

2) 現地調査実施日時

平成23年1月31日(月)～2月6日(日)

3) 調査地域

フィリピン国ルソン島タルラック州ラパスの農家、パナイ島イロイロ市周辺農家、ネグロス島バコロード市周辺の農家並びに関係機関。

4) 現地調査団員

鈴木 俊(アジア農村青年育成協議会会長 東京農業大学名誉教授)

三浦大地(国際農業者交流協会)

5) 調査方法

フィリピン国を訪問し、関係機関並びに農家(本会の農業研修を修了して帰国後の農業経営者)を訪問し聞き取り調査。

調査日程

フィリピンフォローアップ

2011年1月31日～2月6日

2011/1/31 (月)	13:30 PM 15:30 PM	Arrival of Delegates via Japan Airlines JL 741 フィリピン農業省(NAFC)表敬 NOEL A. JULIANO 氏(OIC Executive Director)、NAFCスタッフAHBELさん、SOLEDADさん他 Manila pavilion Hotel (Manila市内)泊
2011/2/1 (火)	8:20 AM 午前 午後	Departure for Iloilo City via Philippine Airlines PR 141 Briefing/Orientation on "Agriculture in the Philippines" Department of Agriculture - Region FU VI (普及センター) LARRY P. NACIONALES 氏(Regional Executive Director)からの説明 Farm Visits to: (1) Alvaro Arconada (2006) Cabatuan, Iloilo Days Hotel Iloilo (Iloilo市内)泊

2011/2/2 (水)	8:30 AM ~ 9:30 AM 午前 午後 20:00 PM ~ 21:00 PM	イロイロ州知事表敬 (イロイロ州庁舎) Farm Visits to: (2) Carlos Dominguez (2002) Lucena, Iloilo Carlos OB宅で昼食 Farm Visits to: (3) Jetro Brillantes (2003) Calinog, Iloilo 研修生OBとの交流会 Days Hotel Iloilo (Iloilo市内) 泊
2011/2/3 (木)	午前 11:30 15:15 PM	Farm Visits to: (4) Ricky Sulpico (2004) Passi City, Iloilo Passi City 庁舎 訪問 庁舎にて昼食(市職員との交流を兼ね)、併設のパイナップル酢製造所見学 Departure for Bacolod City, Negros Occidental via Fast Truck (Boat/ 1hour and 15 minutes) The Grand Regal Hotel (Bacolod市内) 泊
2011/2/4 (金)	10:00 AM 15:00 PM 18:45 PM	Murcia 村内(滝、保養地)見学 Farm Visits to: (5) Elmor Juanitas (2000) Murcia, Negros Occidental Bacolod City 市内市場見学 Departure for Manila via Philippine Airlines PR 136 Manila pavilion Hotel (Manila市内) 泊
2011/2/5 (土)	終日	Farm Visits to: (6) Arturo Reyes Awat (1991) Rizal La paz Tarlac Manila pavilion Hotel (Manila市内) 泊
2011/2/6 (日)	14:50 PM	Departure back to Japan via Japan Airlines JL 742

(作成：三浦大地)

フィリピンの農業概況

1. フィリピンの概要

フィリピンは、アジア大陸の東南方に位置し、東インド諸島の北端に散在する 7,107 の島々によって構成されている。同国最大の島はルソン島で、ミンダナオがこれに続く。同国は日本と同じく環太平洋火山帯に位置するため活火山も多く、島々の多くは山がちな地形となっている。気候的には全土が高温多湿の熱帯気候(Af・Am)で、年平均気温は 26.5 である。周年を通じていわゆる高温多雨でモンスーンの影響を受けている。すなわち、冬季には東北モンスーン、夏季には南西モンスーンにより、ともに雨が多く、特に 5～11 月は多雨となる。国土面積はおよそ 30 万 Km² (わが国の北海道を除いた面積にほぼ同じ) で、人口は 8,900 万を数える。人種構成を見ると、マレー系が主体となっているが、この他中国系、スペイン系、並びにこれらとの混血、更に少数民族である。また、宗教的には、国民の 83% がカトリック教で、その他キリスト教が 10%、イスラム教が 5% 等となっている。同国の人口増加は目覚しく、1970～1980 の増加率は 2.75% とみられていたが、2005～2010 のそれは 1.97% へと減少している。しかし、仮にこの率で推移するとしても 35～36 年後すなわち 2045 年には現在の倍に増加することとなる。以上のことから現在の同国にとって、食糧の増産すなわち農業開発は喫緊の課題である。

2. 農業の概況

フィリピンの農業についてみると、まず農地面積については 1,220 万 ha で、国土面積のおよそ 40% を占めている。このうち、耕地面積が 570 万 ha でおよそ 2 分の 1 を、さらに永年作物が 500 万 ha、牧草地が 150ha となっている。一方、同国の農業人口は総人口の 36% を占めており、また、経済活動人口の 37% を占めていることから、同国経済に果たす農業の役割の重要性を指摘することができる。

次に、主要農産物をみると、米、トウモロコシ、ココナッツ、砂糖、バナナ、パイナップルである。このうち米とトウモロコシは主として国内消費用として、また砂糖、バナナ、パイナップルは輸出作物として重要な位置を占めている。

とくに米についてみると、年 3 回の作付けが可能ではあるものの、人口増加により、1990 年代後半から米の消費量が生産量を上回る事となって、以来一貫して輸入量も増加し、最近では初で 1500 万トンの収穫があるものの未だに自給までいたっていない。これらのことから、同国政府は農業開発を重視しており、国レベルで食糧安全保障を常時確保する、農村地域における貧困の削減、農家純所得の向上、天然資源基盤の持続性の確保、人々のエンパワーメントの増進、をあげ、農業開発に取り組んでいる。特に主食の増産については、同国農業省発行の月刊誌 Aggie Trends ^{注1)}によると、農務長官 P.J. アルカラが、2013 年までに自給を達成したい旨の発言をした記事が掲載されているが、その根拠として、高収量品種の作付けの拡大をあげ、現在は同品種の作付けが 20% であるのに対し、2011 年にはこれを 45% まで拡大し、さらに 2012 年には 65% まで持ってゆきたい、としている。しかし計画どおりにできるか否か疑問の残るところではある。

この他、農村のインフラ整備、雇用の創出、貧困問題、教育の充実や環境破壊等々、多くの問題が見られ、農業・農村開発への取り組みは同国にとって焦眉の急ともいえる課題

である。

以上の把握から、同国の農業・農村開発に関する国際協力の重要性は、これまでわが国においても十分認識され同国に対する国際協力活動によって実施されてきたことは周知のとおりである。

3．農業開発と農業研修の必要性

農業開発とは、一次的には、農業を取り巻く自然環境を破壊することなく、農業生産を量的・質的に拡大・充実することであり、二次的にはこの結果として農業・農村の近代化と農村に住む人々の生活水準の向上と質的充実並びに生き甲斐の追及、生まれてよかったという実感できる社会の実現であり、最終的には、世の中全ての人々に対して、安全な食料を安定的に、安価に供給することへの努力であると考えて間違いなからう。それでは、農業とはいかなるものかということになるが、農業とは「太陽や大地、雨や風の持っている光と温かさや土壌や水や空気などの、いわゆる自然環境としての機能と、動植物の持っている、自然に育とう、育とうとする、いわゆる「自然生育的機能」を利用して、人類に必要な食糧や原料を生産することである。そしてこの場合忘れてはならない重要な点として、これらの仲介をする農業者の存在であり、農業者の質的充実こそ、農業開発を推進する上で最も重視されなければならない課題である。

以上のことから、農業開発には、農業的なあらゆる技術、それは物的技術（アイデアが物となって具現化した物、すなわち、農具・農業機械・肥料・新品種・新作物等々）や、知的技術（アイデアの段階にとどまり形として現すことのできない知識やスキルのようなもの、すなわち、栽培技術・施肥技術・有機技術・輪作技術・家畜飼養技術・経営技術等々）、の農業者への移転・普及と定着の促進であり、これによる就農意欲の向上が必要であることは言うまでもない。このための活動の1つに農業研修という、いわば、生産と販売と生活の現場における物的・知的技術の修得の機会の提供（経験の直接伝授、技術・知識の実践と修得、疑問や不安の投影と対応等々）による、先進農業者指導下での期間を区切った実践活動が有効である点は言うまでもない。これすなわち途上国の有望な青年農業者のわが国への招聘と農業研修である。

本会では、すでに28年間この農業研修生制度を実践してきた。本年は、フィリピン国を対象に、研修後5～6年を経過した研修生OBを訪ね、アドバイスを提供すると共に研修事業の更なる効果と効率化を期待したフォローアップ調査を実施した。次にこれらに関する現地調査結果を記す。

注1〕: Department of Agriculture, 2010. July “*Aggie Trends, Vol.25, No.7*” より。

参考文献 : Deptment of Agriculture 資料

現地調査結果

1. はじめに

これまで述べてきたとおり、(社)国際農業者交流協会が実施してきた途上国の農村青年のわが国における研修事業アセアン研修プログラムを受講した青年が、帰国後どのような活動を行っているかを把握し、その結果本研修事業が相手国の農業や地域の発展にどのように役立っているか、また、本事業のより効果的な研修実施のための改善に必要な資料作成を目的に、2011年1月31日から2月6日にかけてフィリピンの帰国後5～6年の研修生OBを訪ね聞き取り調査を実施した。

この章では、とくに同国農村青年の日本における研修が、渡航前と比較して帰国後の農業経営・地域開発にどのような影響をもたらしているか、また彼らが体験した研修事業に対する評価、並びに今後におけるより効果的な研修に繋がる提言を模索すべく纏めたものである。

2. 研修体験者への訪問調査から

1) カルロス・ドミンゲス (Carlos P. Dominguez) 氏の事例

1] 在住村落 (Balangai Bololacao) の概況

同氏はルソン島マニラから南に空路およそ1時間のパナイ島 (Panay) 内の Barangay Bololacao に住んでいる。ボロラカオ (Bololacao) 村は、なだらかな丘と平地からなる農村で、人口は1,700人余、356戸の静かな村である。人口の80～90%は何らかの形で農業とかかわりを持ち、同村の主産物は米・果物・野菜および畜産物である。とくに野菜類ではナス、オクラ、トマト、スクアシュ等の生産が目立つ。

2] 農業経営の概況 (農業研修前後を比較して)

同氏は、2年制の専門学校 (2 years college) を卒業後、子供の頃からの手伝いは別として、24歳の時から農業を始め、26歳の時 (2002年) に日本における農業研修を体験し、その経験を生かした農業経営を実践中である。現在、34歳独身で両親 (父: 78歳、母 68歳) と同居している。

表1は同氏の農業経営について、日本研修前後に分けて比較したものである。まず、研修前についてみると、経営面積0.7haのうち、稲作0.5ha、果樹0.2haであったものが、研修後 (調査時点) においては、稲作2.5ha、果樹0.3ha (柑橘類・グアバ・パパイヤ、ココヤシ・バナナ)、養魚 (ナマズ) 0.5ha、野菜類 (トマト・十六ササゲ・キュウリ等) および駐車場 (レストラン客用) など (1.7haの借地を含む) 拡大していることが見て取れよう。所得についてみると、研修以前は80,000ペソであったものが、昨年のそれは600,000ペソと7倍余に増加している。

農産物生産量を見ると、稲作では、多い年で籾700カバン (籾1カバン=42kg、29.4トン: 3.9トン/ha)、少ない年で600カバン (25.2トン: 3.4トン/ha) であるという (但し年3回の作付)。ナマズは稚魚を購入して3ヶ月程飼育 (個体重250g/匹以上になった時) した後出荷 (レストランで利用) し、年4回 [8トン] 飼育している。これらの生産物の多くは自営のレストランで利用することとなるが、その外、レストランに来る客へ直

接販売することもある。一方野菜などの一部はマーケットにも出荷している。

ここで、同氏の経営の特徴をみると、前述の通り、農業生産ばかりでなく生産物を利用したレストランを営み、養魚用の池の真ん中に橋をつないだカントリー風の建物（10から15人収容）2棟を建てレストランとして、また70～100人収容できる1棟を敷地内に設けて町から多くの客を集めている。最近では宴会は勿論、結婚式や洗礼式、カラオケや特別の催しなども請け負う盛況振りであるという。池の中にはナマズが養殖されており、また、このレストランから同氏が経営する水田がココヤシの木々の間から一望できる環境を整えてあり、田園風景を満喫できるように設計されている。

水田から見て、レストランの後のなだらかなスロープの低い位置に開かれた駐車場の周りは収穫の容易い矮性パパイヤが栽培され、青い大きな実をつけていた。（これらのパパイヤは既に売約済みであるという）。レストランについては、昨今、農業をベースに加工や販

表1 C. ドミンゲス氏の実習前後の農業経営状況比較

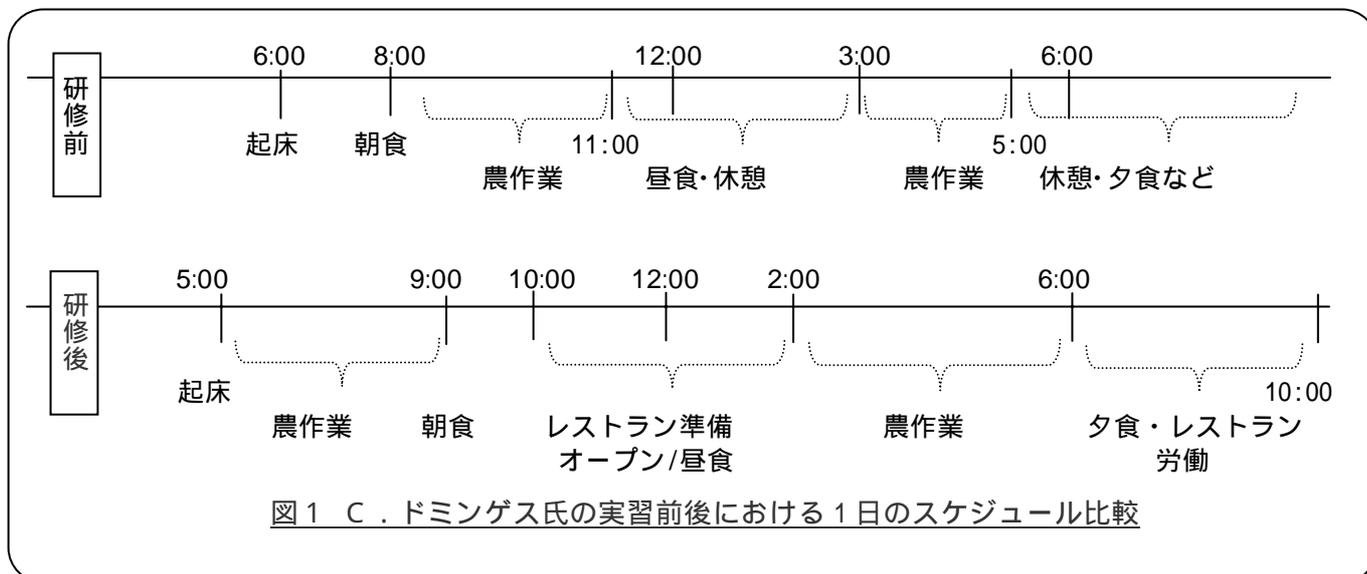
研修前の経営状況（2002年1月）応募時		現在の経営状況（2011年2月）	
主な作物、家畜名	栽培面積、頭羽数	主な作物、家畜名	栽培面積、頭羽数
米	0.5ha	米	2.5ha
果樹	0.2a	果樹	0.3ha
牛	3頭	野菜他	1.7ha
鶏（採卵用）	50羽	鶏（ブロイラー）	50羽
		養魚	0.5ha
養魚（ナマズ）	4,000匹/年	（ナマズ）	120,000匹/年
年間所得概算	80,000peso	年間所得概算	600,000peso

売、交流や観光などを総合的に展開する食農産業を6次産業というようであるが、この特長は農林水産業のように回転率が低い事業分野に「生産（一次）-加工・製造（二次）-販売・サービス（三次）」を組み込むことにより、第一次産業分野を効率の高い合理的経営に結び付けるところにあり、同氏によるとこのレストランは同氏の兄が始めたものであるが、同氏が引き継ぐこととなり、同氏の生産物を供給するようにしたものであるという。なお、同氏の農業と農業以外の所得割合は、農業部門が60%、レストラン部門が40%である。

3] ドミンゲス氏のデリースケジュールの変化（研修前後比較）

次に同氏の一日のスケジュールについてみる。図1は、同氏の日本研修の前後を比較したものである。この図から、研修以前のそれを見ると8時起床・朝食とその後11時までの農作業と、11時以降の中食と休憩の後の3時から5時までの農作業となっており、一日を通じて僅かに5時間の労働時間となっていた。しかし、研修後（調査時点）のそれを見ると、5時起床の食前作業が9時までとなっており、その後の朝食・休憩が10時までの1時間と、10時から午後2時までのレストラン準備と昼食となる。その後2時から6時まで農作業に復帰し、さらに6時過ぎから夜10時までレストランの作業となっている。一日

の労働時間を総合すると、農業労働が 8 時間、レストランでの労働が同じく 8 時となる。この結果から、労働時間は研修前後を比較して、2 倍以上となる。また、起床時間も 3 時間早まっていることから、労働意欲の高まりと、効率的・省時間的意識改革を指摘することができよう。



4] 農業経営への活用状況

先ず、経営規模の変化についてみると、研修前の 1.7ha から 5 ha へ規模拡大し、野菜生産を新たに加え、養魚部門の拡大を図り、一方ではレストラン部門を引き継ぐなど第 6 次産業化を実現した点が指摘できる。農作業の機械化については、それまでの牛による畜耕から機械化を進めており、現在では表 2 に示す各種の農業機械を導入している。

表 2 研修後導入した農業機械類

ハンドトラクター：1 台	三輪自動車 (tricycle) : 1 台
揚水ポンプ：2 基	動力脱穀機：1 台
ジブニー (乗り合いバス) : 1 台	草刈機 : 2 台

次に、新技術の導入状況についてみると、まず上記の農業機械の他、有機農法の導入をあげることができる。これにより、化学農薬の使用を大幅に抑えることができたと言っている。ドミンゲス氏の農場は、有機農業実施農場として District office により認められて、展示園としての機能を持っており、年間を通じて月平均 30 ~ 50 人ほどの農家が現地視察に訪れ、同氏は案内・説明者としての役割を担っている他、農産物の品質も向上して周辺の農家の出荷する価格の 35 ~ 40% ほど高い価格で扱われているという。また、作物の新品種の導入にも積極的で、特にナスとトマトの新品種導入を実現し、一方では先述の矮性パイアも導入している。

次に作付体系の改善についてみると、図 2 に示すとおり、研修前のそれは米の 2 期を中心に、野菜類とナマズ飼育を 5 ~ 6 月から 8 ~ 9 月を中心としていた年 1 回の作付・飼育が、揚水ポンプ 2 基を導入し、一方ではハンドトラクターや動力脱穀機の導入によって稲作の 3 期作やナマズの年 4 回飼育、野菜類の三期作を実現している。

(研修前)

作目 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
米					■				■				
十六ササゲ					■								
ナマズ					■								
野菜(自給用)					■								

図2 作付体系の研修前後比較

(研修後)

作目 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
米	■				■				■				
十六ササゲ	■				■								■
ナマズ	■				■			■		■			
野菜類	■				■				■				

一方、農業関係組織への加入状況についてみると、4-Hクラブ並びに農業協同組合のメンバーとなっている。

次に、同農場の労働投下量の変化についてみると、研修以前は家族労働中心の経営であったが、最近では収穫と植え付け時の多忙な期間には40人からの臨時雇用と、レストランでの常勤7人を雇用するまでに至っており、彼らには昼食付きで、150ペソ/日(この地域では120ペソが相場であるという)を日当として支払っている。このことから、地域に対して所謂「就労機会創出機能」も担うようになって来ていると言うことができよう。

5] 生活規範への影響(研修前後を比較して)

生活規範への影響については 計画的・時間の使い方(省時間的) 合理性・コスト意識(効率的) 自立心・自己確立、 忍耐力、 語学力、 友人獲得、 異文化交流・相互理解・国際協力への関心・理解、 愛国心・民族意識、 その他について質問を用意した。面接の結果、 の自立心と の民族意識以外は、大いに影響を受けたという回答で、ことに の時間の使い方や計画性と、 のコスト意識について影響された点を強調している。また、 のその他について、家族を思いやる、大事にするようになった点をあげている。

6] 帰国後の地域社会への貢献および活動状況

先述の通り、同地域では理想と考えられている有機農業による生産が評価されて、現地視察農家の訪問（月 30～50 人）に対して、案内・説明をする外、同農場の野菜類は有機栽培によるため、同国の大手量販店として知られる MS デパート/スーパーに出荷できることとなっており、安全な野菜供給の機能を果たしている。また、先にも指摘したとおり、同農場の労働力雇用も、地域の遊休労働力に対する雇用機会創出という地域貢献を果たしているとみることができよう。この他、同氏は周辺農家の子弟ならびに同国からの日本向け研修生に対する事前訓練をも引き受け実施している。

7] 同氏の農業・地域活動等に対する評価

これまで述べてきたとおり、同氏の農業・地域に対する活動は高く評価されており、2006 年には最優秀青年農業者(The most outstanding young farmer)として、農業省から表彰されており、その副賞としておよそ 60m² のグリーンハウスが贈られ、同氏の農場の野菜畑の入り口に設置されオクラやピーマンが成育中であった。一方、同氏の有機農業展示圃としての機能と同氏の指導力を評価した農業省は、同氏を「生産現場の科学者 (Farmer-scientist)」として、現在審査中であるという。この審査は農業省を中心とするメンバーから成る委員会による書類審査のみではなく、生産現場まで訪問して審査するという厳しい評価を受けるもので、それだけに価値のある「地域における指導的農業者」としての資格を認めるものであるという。なお、同氏は、帰国時に記した日本研修の感想として「日本で学んだ最新の近代農業技術を他の農業経営者に見せたい。若い農業経営者のためにモデルとなるデモンストレーション農場を持つことが目標である」と記している。

8] 研修事業に対する本人の評価（今後の研修事業の効果を高めるための提言）

最後の質問として、研修事業に対する評価や意見を求めた。この質問に対して、次の 3 点がかえてきた。

研修期間をもう少し長期滞在型にしてもらいたい。(折角日本の生活に慣れたと思った時点で帰国しなければならず、もう 1 ヶ月・2 ヶ月の間に大いに学ぶことが出来たのではないかと残念に思えた。(但し、同氏が研修した当時の研修期間は 8 ヶ月であった)

研修生の人数を増加して欲しい。(海外研修という素晴らしい、人生で二度と得がたい経験なので多くの農村青年に体験させたい。)

帰国後顕著な実績を上げている者に対して、日本側による表彰・顕彰などの制度を創設して欲しい。



カルロス・ドミンゲス氏と彼の水田



同氏の観光農園を兼ねたレストラン



ホストファーマーの訪問



ナマズ飼育池とレストラン(建物の後方に同氏の広大な水田風景が広がっている)

2) ジェトロ・ブリジャンテス (Jetro C. Brillantes) 氏の事例

1] 在住村落 (Balangai Bololacao) の概況

同氏はルソン島マニラから南に空路およそ 1 時間のパナイ島 (Panay) の Barangay Malaguinabot に住んでいる。マラギナボット (Malaguinabot) 村は平地に拓かれた農村で、人口はおよそ 800 人余、84 戸から成るココヤシとバナナに囲まれた水田の広がる静かな村である。人口の殆どが農業とかかわりを持ち、同村の主産物は米・サトウキビ・トウモロコシ・バナナである。

2] 農業経営の概況 (農業研修前後を比較して)

同氏は、初等教育 (小学校: 6 年制)、中等教育 (中・高等学校: 4 年制) を卒業した後 2 年間の専門学校 (Technologica college) を卒業後、18 歳の時から家業の農業を手伝い始め、22 歳の時 (2002 年) に日本における農業研修を体験し、帰国後その経験を生かした農業経営を実践中である。現在 30 歳で妻 (27 歳)、長男 (3 歳) 長女 (10 ヶ月) と母 (62 歳) の 5 人家族である。

表 1 は同氏の農業経営について、日本研修以前と以後に分けて比較したものである。まず、研修前についてみると、経営面積 1.75ha のうち、稲作 1ha、コーヒー 0.25ha、ココヤシ 0.5ha で、家畜は水牛 2 頭と養鶏 (採卵用 50 羽) の飼育であった。しかし研修後 (調査時点) においては、稲作 2.0ha、ココヤシとバナナ 4ha、サトウキビ 1.0ha の規模となり、経営面積の比較では研修以前に比べて 5.25ha ほど拡大している。一方家畜はヤギや養豚が加わっている。養鶏 (採卵用) とヤギは自給を兼ねた出荷用とのことである。養豚 12 頭はフィリピン農業省全国農業水産協議会 (NAFC :National Agricultural & Fishery Council) のプロジェクトにより昨年の 11 月から進めているもので、10kg の子豚を導入して 80kg まで肥育して出荷する計画である。

表 1 ジェトロ・ブリジャンテス氏の実習前後の農業経営状況比較

研修前の経営状況 (2003 年 1 月) 応募時		現在の経営状況 (2011 年 2 月)	
主な作物、家畜名	栽培面積、頭羽数	主な作物、家畜名	栽培面積、頭羽数
米	1ha	米	2.0ha
コーヒー	0.25ha	ココヤシ・バナナ	4.0ha
ココヤシ	0.5ha	サトウキビ	1.0ha
養鶏	50 羽	鶏	50 羽
水牛	2 頭	養豚	12 頭
		ヤギ	10 頭
		水牛	1 頭
年間所得概算	150,000peso	年間所得概算	350,000peso

この他、表には記されていないが、自給用 (残余部分は出荷) の野菜類を栽培していることとは言うまでもない。なお、所得についてみると、研修以前は 150,000 ペソであったもの

が、昨年のそれは 350,000 ペソと 2 倍余に増加している。

次に、農産物生産量を見ると、稲作では、年 3 回作付し 1 作当りおよそ 8 トン (4 トン/ha) を収穫している。サトウキビは植え付け後収穫まで 10 ヶ月を要するといわれ、生産量は 80 トンである (但し“芽出し”によるものは 120 トン/ha と多い。しかし、この方法は同地域では 4 回までであるという)。一方ココヤシについては、10 トン/年。バナナについては 5~6 トン/年である。これらの生産物のうち、米は 80%、サトウキビは 100%、果物類は 80% を出荷している。出荷の方法は直接マーケットに持ち込んでいる。

3] ブリジャンテス氏のデイリースケジュールの変化 (研修前後比較)

次に同氏の一日のスケジュールについてみる。図 1 は、同氏の日本研修の前後を比較したものである。この図から、研修以前のそれを見ると 6 時に起床して、2 時間の水牛・鶏の世話をした後 8 時に朝食をとり、その後 12 時まで「仕事待ち」または農作業となっている。その後、12 時に昼食をとり一休みの後、家畜の世話をし、仕事待ちまたは農作業を 3 時~4 時まで続け 7 時頃夕食となり、9 時~10 時に就寝という 1 日を過している。なお、この「仕事待ち」とは、近隣の農家からの「日雇い労働の連絡待ち」を意味し、この連絡がない場合は農作業を続けていた。この日雇い労働の機会はおよそ 70% の確立で就労できたとのことである。この時点では同氏の父親が健在 (当時の記録では 59 歳) で農業経営に当たっていた時期であり、同氏は父親の土地の 1 部を耕作していた、言わば見習い・修行中の立場であったと考えることが出来よう (なお、同氏の父親は、同氏が日本研修から帰国後の 2008 年に亡くなっている)。一方、研修後 (調査時点: これ以後特別な場合を除き単に研修後と記す) のそれを見ると、5 時に起床し、家畜の世話の後、7 時に朝食をとり、12 時までの農作業となっている。午後の作業は 12 時の昼食後 6 時までとなり、夕食は研修前と同じく 7 時となっている。これらのことから、研修の前後を比較して、大きく異なる点は、起床時間を 1 時間早めた点、「仕事待ち」の時間が午前・午後ともなくなり、農作業に没頭できるようになった点、しかも午後からの作業時間がそれまでより 2~3 時間延

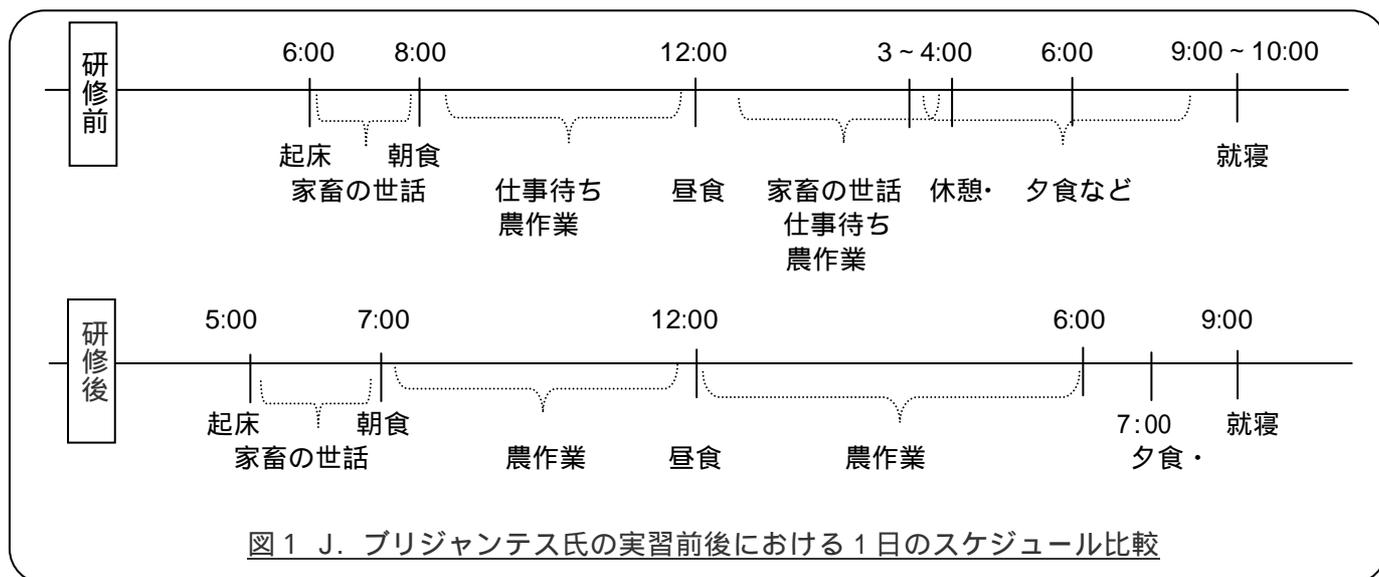


図 1 J. ブリジャンテス氏の実習前後における 1 日のスケジュール比較

長し6時までとなった点などをあげることができる。一日の就労時間を比較すると、(仮に食事時間を前後1時間として差し引くとしても)研修前のそれが7時間であったのに対し、研修後のそれは10時間に増加している。他方、仕事の質・集中度を考慮すると、「仕事待ち」の時間が排除されたことによる質的充実と農場管理への配慮・充実という点は見逃すことができない。以上の結果から、研修の効果として、労働意欲の向上、経営管理意識・意欲の向上を指摘できよう。

4] 農業経営への活用状況

先ず、経営規模の変化についてみると、研修前の1.7haから7haへと規模拡大し(高卒後に父親の農地の一部で始めた農業から、後に父親の農地全てを引き継いだ)、ココヤシやバナナとサトウキビが加わり、一方では畜産部門の養豚とヤギ飼育を加え経営の拡大充実を図っている。なお、農作業の機械化については草刈機(帰国時にホストファーマーからプレゼントされているが、その後買い換えたのか否かは未確認)の外見るべきものはない。しかし、かつて「仕事待ち」の経験をした同氏としては、機械化にかかるコストと燃料費等を計算に入れると、同地域の現状から考えて、安い労働力の雇用が可能で、また農村の遊休労働力の活用を相互扶助という視点から考えると、これらの隣人の労働吸収・活用の機会創出を配慮した結果であると考えの方が自然であろう。

次に、作付体系の変化についてみると、図2に示すとおり、研修前のそれは、米の3期作を中心にコーヒー、ココヤシを栽培していた。研修後については米の3期作とココヤシ^{注1)}は以前と変わらないがコーヒー栽培が取止めとなっている。一方サトウキビの導入がみられるが、サトウキビは1月植え付け(または収穫後の株出し)に始まり、11月の収穫までおよそ10ヶ月の栽培期間が見込まれている。ココヤシの収穫は1月と9月の年2回に分けて行われ、他の期間は樹上の枯枝の撤去作業(掃除)や施肥作業を適宜実施しているという。

次に、農業関係組織等への加入状況についてみると、4-Hクラブのメンバーとなっている。なお、現在農産物の協同販売について仲間を集め検討中であるという。

5] 生活規範への影響(研修前後を比較して)

生活規範への影響については 計画的・時間の使い方(省時間的) 合理性・コスト意識(効率的) 自立心・自己確立、 忍耐力、 語学力、 友人獲得、 異文化交流・相互理解・国際協力への関心・理解、 愛国心・民族意識、 その他について質問を用意した。面接の結果、時間の使い方(省時間的)の改善、コスト意識の高揚、自立心、忍耐力、友人獲得、異文化交流、愛国心・民族意識について研修中を通じて改めて考えさせられ、感じることもあって、大いに刺激され、涵養されたと述べている。

6] 帰国後の地域社会への貢献および活動状況

同氏が埼玉県で学んだ田植えにおける稲の栽植密度^{注2)}や、IPM(総合防除)技術及び野菜の植え付け技術について、周辺農家にアドヴァイスし、普及中である。また、帰国後同氏は父親の農業を引き継ぐこととなったが、その責任と日本における経験から、農業関係の友人を可能な限り多く持つように心がけ、情報の収集と共有に努める一方、農産物の

共同出荷についても現在仲間と検討中である。この他、規模の拡大により、所得が向上する一方で、これまで以上に労働力が必要となっているが、先にも述べたとおり機械化（燃料費も含む）するよりは地域における遊休労働力の活用を配慮し・実行している。

作目	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
		米											
コーヒー	収穫												収穫
ココヤシ	収穫									収穫			
家畜 ^{注3]}													

注3]: 養鶏 50 羽、水牛 2 頭

図2 作付体系の研修前後比較

作目	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
		米											
サトウキビ													
ココヤシ	収穫									収穫			
家畜 ^{注4]}													

注4]: 養鶏 50 羽、養豚 12 頭、ヤギ 10 頭、水牛 1 頭

以上の把握から、同氏の地域への貢献は始まったばかりであるということができよう。ちなみに同氏の帰国時に記した感想に、「農協の役割の重要性について学んだ」点を上げている。

7] 同氏の農業・地域活動等に対する評価：同氏の地域活動（日本で修得した田植法や、野菜植え付け技術等の普及活動）は当に始まったばかりであり今後の活動が期待される。

8] 研修事業に対する本人の評価（今後の研修事業の効果を高めるための提言）

最後の質問として、研修事業に対する評価や意見を求めた。この質問に対して、次の5点が返ってきた。

研修では大いに学ぶことができた。しかし、その効果が出ていないと皆様が評価されるとしたら、その理由は、最近になってやっと日本での経験を実行できるようになり、開始したばかりであるからである。

もう少し養豚について実習したかった（しかし同氏の応募時の希望業種は、稲作、野菜、苗木の順で希望を記してある。おそらく最近養豚を始めたからであろうと推測される）。

もう少し地方研修（配属県における先進事例等のガイダンス、視察、交流等）の日数を長くしてもらえると、配属県の農業や様々な特色への理解が深まると思われる。研修期間をもう少し長期にしてもらいたい（但し、同氏が研修した当時の研修期間は11ヶ月であった）。

注1): ココナッツ酢を造っている（生産&加工）という説明であったが、同氏の住宅敷地内ではそのような施設は見当たらなかった。おそらく、小屋を建て、瓶を並べるなどの、簡単なものをココヤシ園の中に設置しているものと思われる。

注2): 同氏が研修を受けた埼玉県のプロファーマーの当時実施していた田植えは、機械植えであったが、水田の枕（田植機が使えない水田の両端）の部分を手植えで補植する際、苗の株数と株間についてアドバイスされ、それを覚えて帰って実践しているものと考えられる（プロファーマーの説明による）。



ジェットロ・ブリジャンテス氏と彼の水田



同氏の水田とココヤシ



プロファーマーの訪問と熱帯果物での歓迎



同氏の飼育するヤギの親子（10頭のうちの一部）

3) リッキー J. スルピコ (Ricky J. Sulpico) 氏の事例

1) 居住村落 (Balangai Bololacao) の概況

同氏はルソン島マニラから南に空路およそ 1 時間のパナイ島 (Panay) の Barangay Pagaypai に住んでいる。このパガイパイ (Pagaypai) 村は、同島のイロイロ市の北東に車で 1 時間半ほど走ったところに位置する平地からなる農村で、人口は 653 人、135 戸が居住する静かな村である。同村の人口の 80% 以上は農業とかかわりを持っているといわれる。なお、同村の主産物はサトウキビ、米、および畜産物である。なお、R. スルピコ氏は現在同村の村長 (Balangai Captain) を努めている。

2) 農業経営の概況 (農業研修前後を比較して)

同氏は、6 年制の初等教育、5 年制の中等教育卒業の後、4 年制の技術大学 (Wesern Institute of Technology) を卒業し直後から専業農家として同地で取り組んでおり、26 歳の時 (2004 年) に日本における農業研修 (切花・水稻) を体験している。現在、32 歳独身で、父 (74 歳) 母 (65 歳) の 3 人家族である。

表 1 は同氏の農業経営について、日本研修以前と以後に分けて比較したものである。まず、研修前についてみると、経営面積 2.54ha のうち、稲作 2.5ha、野菜類 0.03ha、切花 0.01ha で、畜産部門は養鶏 40 羽、七面鳥 25 羽および養魚 (テラピア) 600 匹であったものが、研修後においては、稲作 3.0ha、野菜・果樹類 (主としてマンゴー) 0.75ha の他、養鶏 95 羽、養豚 4 匹、養魚 (ナマズ) 600 匹となり、経営面積 1.21ha が増加し、耕種・畜産部門とも拡大している。所得についてみると、研修以前は 80,000 ペソであったものが、昨年のそれは 250,000 ペソ (内 5 万ペソは農外収入) と増加している。

表 1 リッキー・スルピコ氏の実習前後の農業経営状況比較

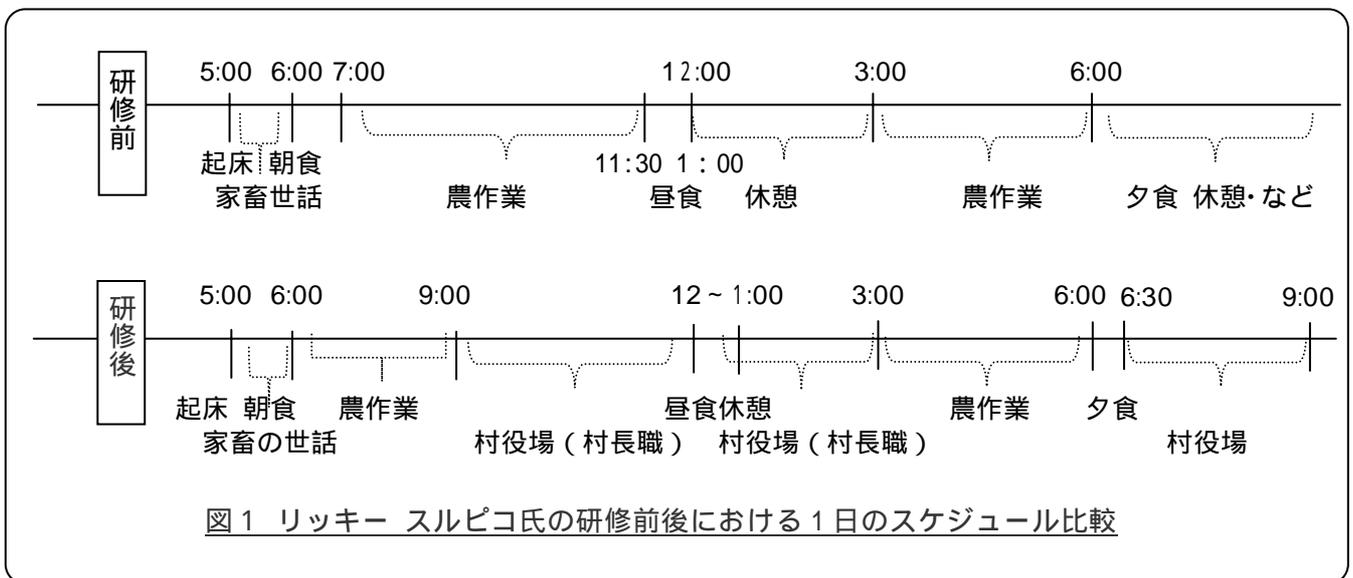
研修前の経営状況 (2004 年 1 月) 応募時		現在の経営状況 (2011 年 2 月)	
主な作物、家畜名	栽培面積、頭羽数	主な作物、家畜名	栽培面積、頭羽数
米	2.5ha	米	3.0ha
野菜類 / 切花	0.03ha/0.01ha	野菜 / 果樹	0.75ha
養鶏	40 羽	養鶏	95 羽
七面鳥	25 羽	養豚	4 匹
養魚 (テラピア)	600 匹	養魚 (ナマズ)	600 匹
耕地面積	2.54ha	耕地面積	3.75ha
年間所得概算	80,000 ペソ	年間所得概算	250,000 ペソ

農産物生産量を見ると、稲作では、年 3 回作付けし 1 作平均 8 トン (190 カバン : 籾 1 カバン = 42kg) 収穫している。野菜類は自給 (60%) を兼ねて作付けており、ナマズは稚魚を購入して 4 ヶ月程飼育した後その 90% を出荷、鶏 (ブロイラー) は 4 ヶ月かけて年 2 回飼育しおよそ 80% を出荷している。また、養豚については 4 頭ずつ年 2 回に分けて 4 ヶ月/回をかけて肥育し出荷している。

ここで、同氏の経営の特徴をみると、米を主体とする自給と販売を考慮した農業を心がけており、一方では小規模ながら畜産を導入して有機肥料の自給を図っている点にある。また、労働力配分の視点からみると、同氏はいまだ独身であるため、両親の高齢化と自家労力を考えた小規模畜産を加え、稲作の多忙な時期には地域の労働力を雇用し、遊休労働力の吸収に心がけている点にある。

3] スルピコ氏のデリースケジュールの変化（研修前後比較）

次に同氏の一日のスケジュールについてみる。図1は、同氏の日本研修の前後を比較したものである。この図から、研修前後のそれを見ると起床や食事時間の変化は見られないが、農作業の時間の減少が目につく。この理由は、同氏が在村長（Balangay Captain）として活躍しているためである。すなわち、午前9時から12時、午後1時から3時までは村役場に勤務することとなっており、その他の時間を農作業に当てているからである。また夕食後6時から9時まで村役場に詰めていなければならないこととなっているため、特別な用事が無い限りその時間を仮眠に当てているという。以上の把握から、一日を通じて僅かに7時間弱の農業労働となっている。しかし、農業労働時間の減少とは別に公務に時間を割いているため、多忙な毎日となっており、地域の人々に尊敬され頼りにされていることは間違いない。同氏は未だ独身で若干32歳という若さではあるが、研修生OBの中では農村のリーダーとして際立った活躍をしている1人である。ちなみに、同氏の研修終了時の感想の中に、「忍耐力そして持久力を身につけた。（中略）学んだことを仲間と共有して地域を助けることができればよいと思う」と記しているが、まさにその通り実践していると見て取ることができる。



4] 農業経営への活用状況

まず、経営規模の変化についてみると、研修前の2.54haから3.75haへと規模拡大し、この中で、米の作付ならびに野菜生産と果樹（マンゴー）を拡大している。畜産部門では養鶏を拡大し、養豚を新たに加えている。また、養魚部門では、それまでのテラピアから

ナマズに魚種を変えている。なお、同氏の帰国後に増加した農地面積（1.25ha）は同氏が意欲的に農業経営に努力すべく借地したものである。この面積の拡大に伴って、ハンドトラクターと揚水ポンプを導入している。（同氏は研修中稲作農家で、トラクター、除草機、ロータリー、スプレー等々の農業機械実習を経験し農業機械の扱いと省力機能を十分認識している。）したがって、村長としての多忙な中での稲作をこれらの機械により解決しているといえよう。また、同氏は稲の新品種の導入や、有機農業の緩慢ではあるが推進も始めており、生産量の増大や品質の向上にも力を入れている。このため同氏の水田は地域のデモンストレーション・ファームとして利用されている。この外、水田の一部では、カタツムリの急激な増殖に対するアヒルの導入や、IPM(総合防除)なども実施している。これらの活動も、研修中に培った技術・知識を共有しようとする積極的な姿勢と見ることができよう。なお、先にも触れたとおり、同氏の生産物は直接マーケットに出荷されている。一方、同氏は帰国後農業情報や技術を修得するために多くの講習会やセミナー（Hundreds of training and seminars）に積極的に参加している。この他、村のリーダーとして、村内の農業青年や4-Hクラブに対して農産加工分野（ジャム、ピクルス、パイナップル・ワインなど）の開発を奨励し推進している。

作目	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
	米		■				■				■			
養鶏			■					■						
テラピア							■							
野菜（自給用）						■								

図2 作付体系の研修前後比較

作目	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	米		■				■				■		
野菜類				■				■					
ナマズ							■						
養豚		■				■							
養鶏		■					■			■			
アヒル			■			■							

以上の結果として、帰国後の努力も含めて、少しずつ技術・知識の修得も進み生産を高

めつつある。また、各種の技術導入や時間管理（Time management）によって、労働量の削減が可能となり、所得の増大に繋がっている。

次に、作付体系についてみると、図2に示すとおりである。すなわち、研修前は稲作（年3作）、養鶏（年1回）、養魚（年1回：テラピア）等であったものが、研修後のそれを見ると、稲作（年3回）は同じであるが、野菜作（年2回）と魚種がテラピアからナマズに変わっている一方、養豚（年2回）と養鶏（年2回）並びにアヒル（年1回）が加わっている。

5] 生活規範への影響（研修前後を比較して）

生活規範への影響については 計画的・時間の使い方（省時間的） 合理性・コスト意識（効率的）については、自立心・自己確立、忍耐力、語学力、友人獲得、異文化交流・相互理解・国際協力への関心・理解、愛国心・民族意識、その他について質問を用意した。面接の結果、全ての項目に肯けるとしながらも、とくに 計画的・時間の使い方（省時間的）に関して、スケジュールを書き出すことにし、その中で最も重要な事柄の処理を優先するようにした。 の自立心について、労働に対する継続心・耐久力を養うことが出来た。 の語学力について、コミュニケーション技術として意識し、自己開発をすることに成功した。 の友人獲得について、セミナーや代表者大会に参加するようになり、多くの友人の獲得に繋がった。 異文化交流・相互理解については、異文化の人々と係わり合いを持つことは大変難しいことではあるが、彼らと知り合うことよって得られる数々の有意義な事柄・内容を修得することができた（経験することができた）ので、抵抗なく、自然にそうすることができるようになった、等々をあげている。また家族の同氏への評価としては、労働に対する積極的姿勢と情熱が醸成された点、本人の思想的・想像的視野の拡大と、農業に対する関心（と同時にある種の愛着・心配）の拡大をあげている。

以上のことから、研修が、同氏の帰国後の生活規範に大きな影響を与えていることは明白である。

6] 帰国後の地域社会への貢献および活動状況

先述の通り、同氏は4-Hクラブや青年農業者の育成に力を入れており、特に4-Hクラブは、農産加工分野において先述のパイナップル・ワインの開発などの実績が認められて、2度にわたって“National Search Outstanding Organization”の最優秀クラブとして農業省から表彰されるまでになっている。青年農業者の育成については、村内の農業青年を組織化し農業技術の共有とともに、農産加工とくに果物の加工（ドライフルーツやパイナップル・ワイン）生産を進めている。したがってこれらの加工のための機具機材の導入とワイン研究所を既に建設している。一方、同氏は一般の農家に対して、“Meeting”と称する会合を設立して、同氏が講演者となり、さまざまな活動について勉強会（農談会というべきか）を開いている。この外、近隣の農村に対して、同村の青年農業者の活動を紹介して、同様の活動を推進するような働きかけも行っており、そのための研修機材等は既に整いセミナー並びに研修を実施している。これらに加えて、教育の重要性に鑑み、同村に小学校を設立して村民子弟の初等教育をも開始している。

以上のことから、これらの内容は同氏に対して、「帰国後の地域への貢献および活動状況」についての質問の答えとして同氏が話してくれた内容である。これらの内容が全て日本における研修経験がもたらしたものではないとしても、研修が同氏に与えた影響の大きさを図り知ることができよう。

7] 同氏の農業・地域活動等に対する評価

これまで述べてきたとおり、同氏の農業や地域に対する活動は高く評価されているが、これまで述べてきた活動が、地域の人々の共感を得てこそ推進できたものである。勿論全てが村長就任以前になされたものではないにしても、同氏の視野の広さと勤勉さは、生来の資質ではあるろうが、日本における研修がこれらの資質をさらに助長・増幅するチャンスになっていることは否定できないと考える。そしてこれらの活動が同氏の村長就任に繋がったものであろう。同氏は地域のリーダーとしてまた農業・農村開発のリーダーとして多くのものを日本研修で学んだことは確かである。

8] 研修事業に対する本人の評価（今後の研修事業の効果を高めるための提言）

最後の質問として、研修事業に対する評価や意見を求めた。この質問に対して、次の3点がかえってきた。

研修期間の延長と研修内容・分野の拡大。但し、同氏が研修した当時の研修期間は11ヶ月であった）

フィリピンの研修生には、英語の分かる受入農家があれば、コミュニケーションが取れると感じたのだが。

研修に関して、もう少し総合的な内容(Comprehensive matters)も必要ではないかと考える。

ホストファーマーによる研修生訪問を実現して欲しい（同氏のホストファーマーが不参加であった）。



村長として活躍中のリック スルピコ氏
と彼の水田（直播）



同氏の指導で開発されたパイナップル・ワイン(このワイン作りに携わった4Hクラブは最優秀クラブ”として表彰された)



ホストファーマーの訪問(スルピコ氏はこの畦道を毎日村役場に通っている)



ブロイラーの飼育(果樹による適度な日陰が保たれている。(同氏の住宅の裏側)

4) アルバロ C. アルコナーダ (Alvaro C. Arconada) 氏の事例

1) 在住村落 (Balangai Janipaan Este) の概況

同氏はルソン島マニラから南に空路およそ 1 時間のパナイ島 (Panay) 内の Barangay Janipaan Este に住んでいる。ジャニパアン エステ (Janipaan Este) 村はなだらかな丘陵と平地からなる農村で、人口は 450 人余、90 戸の静かな村である。人口の 80~90% は何らかの形で農業とかかわりを持ち、同村の主産物は米・果物・野菜および畜産物である。

2) 農業経営の概況 (農業研修前後を比較して)

同氏は、2 年制の専門学校 (2 years college) を卒業後、20 歳の時から農業を始め、24 歳の時 (2006 年) に日本における農業研修を体験し、その経験を生かした農業経営を実践中である。現在、29 歳独身で両親 (父: 68 歳、母 63 歳) と同居している。

表 1 は同氏の農業経営について、日本研修前後に分けて比較したものである (但し、研修以前については、同氏が主体的に農業経営に携わっていたというよりは、父親の農業を手伝っていたと考える方が適当であろう)。したがって同氏の当時の経営面積についてみると、今回の聴き取り調査から、稲作が 1.5ha のみである。(父親のそれについては、当時の提出書類から、経営面積 4.0ha のうち、稲作 2.0ha、バナナ 1.0ha、野菜 1.0ha と、家畜は牛 4 頭、水牛 5 頭、養鶏 500 羽、養魚 [200 匹] であった)。

ところで、同氏の研修以後の経営をみると、稲作 2.0ha、緑豆とスイカ (間作) 1.0ha、ヤギ 13 頭、養魚 (ナマズ) 0.5ha 等で、この他、屋敷続きの畑地に野菜 (ナス、ショウガ、ニガウリ、トマト等) や果樹 (グアバ、マンゴー、ココヤシ等) が栽培されている。なお、ヤギ飼育に関しては、National Agricultural & Fisheries Council の実施する新プロジェクトとして 2010 年の 12 月から開始したものである。^{注 1)}

表 1 A. アルコナーダ氏の実習前後の農業経営状況比較

研修前の経営状況 (2006 年 1 月) 応募時		現在の経営状況 (2011 年 2 月)	
主な作物、家畜名	栽培面積、頭羽数	主な作物、家畜名	栽培面積、頭羽数
米	1.5ha	米	2.0ha
野菜類・バナナ等		野菜類	0.80ha
		緑豆 + スイカ	1.0ha
		ヤギ	13 頭
		養魚 (ナマズ)	} 0.2ha
		(テラピア)	
耕地面積	1.5ha	耕地面積	4.0ha
年間所得概算	80,000peso	年間所得概算	120,000peso

以上の把握から経営面積の拡大というよりは、父親の農業を引きついたと見るべきであろう。したがって同氏の責任範囲が拡大し、それに伴って作目の改変や、所得の向上に繋

がってきているとみることができる。ちなみに、所得についてみると、研修以前は 80,000 ペソであったものが、昨年のそれは 120,000 ペソに増加している。

3] アルコナーダ氏のデイリースケジュールの変化（研修前後比較）

次に同氏の一日のスケジュールについてみる。図 1 は、同氏の日本研修の前後を比較したものである。この図から、研修以前のそれを見ると 9 時に起床し農作業に取り掛かり、途中 10 時に朝食をとって 12 時までの 3 時間弱が午前中の作業時間で、午後からは、2 時までの食後休憩の後、2 時から 4 時までの 2 時間のみである。したがって 1 日の労働時間は僅かに 5 時間弱のみであった。同氏の表現を借りると、あの頃は「適当に農業をしていた (Feeling Agriculture)」というおりであろう。しかし、研修後のそれをみると、3 時半に起床しコーヒーを飲み、4 時には家畜 (ヤギ) の世話にとりかかり、5 時に朝食をとり、5 時半から 12 時まで農作業をし、午後は 12 時以後 1 時まで昼食・休憩し、その後 7 時半の夕食まで 6 時間余の農作業で、1 日の労働時間を合計すると 13 時間余となる。この後 8 時から 11 時まで地域開発に関する勉強を進めているとのことであるが、この 3 時間を差し引いて考えて見ても、研修前後の同氏の労働時間の増加は目覚しく、農業経営や地域開発に関する取り組み並びに意気込みの変化は十分見て取ることができよう。

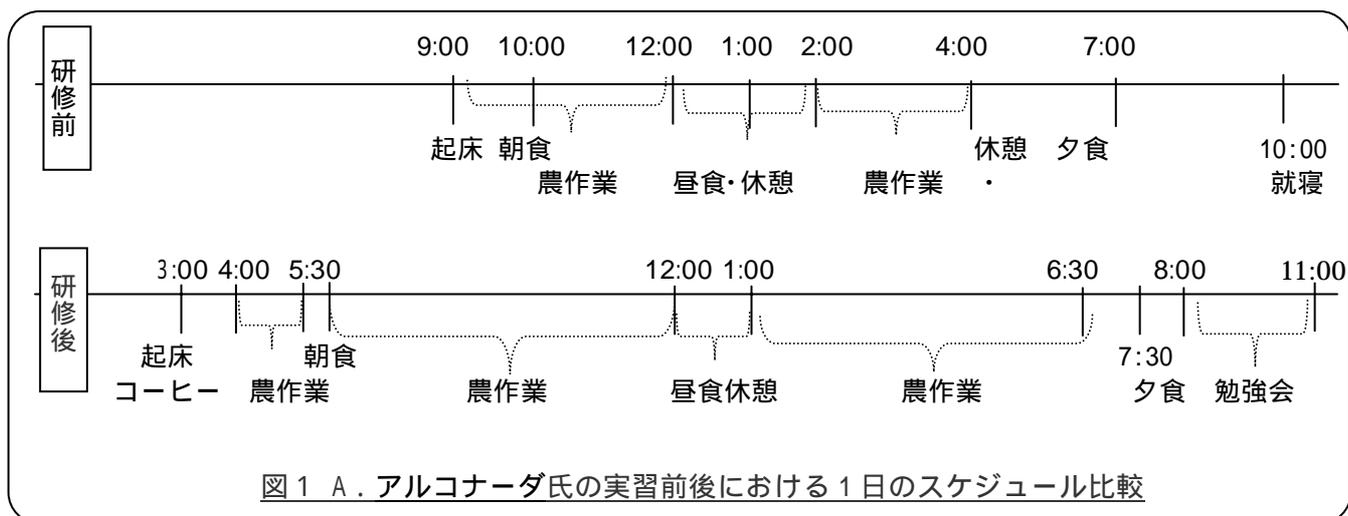


図 1 A. アルコナーダ氏の実習前後における 1 日のスケジュール比較

4] 農業経営への活用状況

まず、経営規模の変化についてみると、研修前の 1.5ha から 4ha へと規模拡大は、同家の農地の父親からの引き継ぎとしての増加と見ることができるが、作目をみると、緑豆とスイカのローテーション、野菜栽培 (ナス、ニガウリ、ショウガ、トマト、トウモロコシ、レモングラス) の導入がみられる。また、農業機械については、ハンド・トラクター (1 台) と、揚水ポンプの導入が見られ、労働投下量の削減が可能となったと同時に次作の土地準備に時間を費やさなくなった分だけ省時間的な作付が可能となっている。一方、新技術並びに作物の導入についてみると、日本からの有機農法は勿論国内のそれも取り入れている。これにより、化学農薬の使用量を削減でき、95% は有機農業による生産が可能となり、品質も向上し、販売し易くなったという。

次に作付体系についてみると、研修以前は稲の 2 期作と自給用の野菜並びにバナナ程度

の極めて単純な作付であったが、帰国後（最近）のそれを見ると、稲の3期作の他に、緑豆とスイカのローテーション並びに野菜類の作付が増加し、一方ではヤギのプロジェクトの導入による家畜管理と養魚（ナマズとテラピア）も導入されている。野菜＋家畜＋養魚の組み合わせは、タイやベトナムなどでも見られる農地の立体的活用と、これら部門の残渣を利用した資源循環型有機農業の一つであるが、同地でのシステムが、これと同様であるか否かについては確認できなかった^{注1)}。また、農産加工に関しては、バナナチップの加工を始めたということであったが、同家ではその施設を目撃することが出来なかった。おそらく協同で始めた事業で施設は別な場所にあるものと推測される。

作目 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
	米	—————				—————							
野菜	—————								—————				
バナナ	—————												

図2 作付体系の研修前後比較

作目 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
	米	—————				—————					—————			
スイカ・緑豆	————— 緑豆				————— スイカ									
野菜類	—————							—————						
ヤギ	—————													

以上のことから、同氏の農業は出荷可能な農産物生産が増加しつつあり（商業的農業の推進）、直接販売や、仲買人への販売量が増加している。したがって農業に関する情報にも以前に比べて気を配るようになったという。これらの実績と経験から、同氏は地域の環境管理や気候変動に考慮した農業並びに淡水漁業（規模は小さいが）に関する話題提供者として地域に貢献することができるようになってきている。

なお、同氏は所得の向上に伴い、6人の兄弟に教育機会を与えるべく専門学校や大学の経費負担をし、そのうちの1人はIT技術者として、他の1人は会計士として現在活躍中であるという。

5] 生活規範への影響（研修前後を比較して）

生活規範への影響については 計画的・時間の使い方（省時間的） 合理性・コスト意識（効率的） 自立心・自己確立、 忍耐力、 語学力、 友人獲得、 異文化交流・相互理解・国際協力への関心・理解、 愛国心・民族意識、 その他、について質問を用意した。面接の結果、これら全てに多かれ少なかれ影響を受けたという回答ではあるが、特に、
の省時間的な行動・計画への指向、 の自立心の確立について影響を受けた点を強調している。

6] 帰国後の地域社会への貢献および活動状況

同氏は村会議員、4-Hクラブの会長、多目的組合のコンサルタントとして地域活動に参加する一方、地域に昔から存続している文化活動（楽器・ダンス等）グループにも積極的に参加している。また先述のとおり、地域の環境管理や気候変化を考慮した農業に関する話題提供者として、また有機農業の推進についても積極的に活動中である。

7] 同氏の農業・地域活動等に対する評価

同氏は、帰国時の日本研修の経験について、「トマトを中心とした研修をしたので、トマトを専門とする農家になりたい(中略)他の農家のモデルになりたい」と記しているが、同氏が日本で学び取った技術や経営に対する意欲並びに省時間的な行動等は、同氏の地域活動（先にあげた環境管理や気候変動を考慮した農業などの話題提供者として、また4-Hクラブの会長など）となって現れており、これらの活動が地域の人々に評価された結果、地域のリーダーとして村会議員の就任につながっているものとみることができよう。なお、同氏は農村青年の派遣前研修生の受け入れにも協力している。

8] 研修事業に対する本人の評価（今後の研修事業の効果を高めるための提言）

最後の質問として、研修事業に対する評価や意見を求めた。この質問に対して、大変よかったという答えとともに次の数点が指摘された。

特によかった点として、農業協同組合について学ぶことができたこと。

改善して欲しい点としては、

1)研修期間をもう少し長期にしてもらいたい。

2)言葉の研修をもう少し長期で実施して欲しい。

3)生産物のパッキングやマーケティングに関する研修を強化して欲しい。

有機農法による農業研修の拡大と有機農業実施中の農家への視察研修の拡大。

注1]: ヤギ飼育に関しては1986年以来同国農業省により開設・推進された制度で、本会の研修経験者が帰国後に再就農支援（Re-entry Assistance to JAEC graduate）を受けることができるシステムであるという（事例2のJ.ブリジャンテス氏も受けていた）。なお、ヤギ飼育に関しては、ベトナムなどでも「国立ヤギ・ウサギ研究所」を設け試験研究を、また、ラオスの国立ドンカムシャン農林業センターや農業専門学校においてもウサギやヤギの飼育を見ることができる。これらは、FAOによる21世紀における蛋白源不足の対

応策として、人類と競合する食料以外の飼料（草や木の葉）により蛋白質を確保できる家畜としての位置づけの確認と推進を目的に進められているものと考えられる。とくに広大な牧草地（150万 ha）を有するフィリピンにおいてはこの部門の推進は不可欠なものと考えられる。一方、ラオスのそれについてみると、ウサギの飼育（肉の確保）と糞を利用したミミズの飼育（魚および食用ガエルの餌として）などがみられる。（鈴木俊,2009「途上国はいま」東京農大出版会 p.25、および、鈴木俊,2008「ラオスにおける農業教育の実態と課題」SAEDA, p.49）

また、資源循環型農業に関しては、畑地における野菜や果物生産とその残渣を家畜に与え、家畜の糞を養魚に利用するというシステムで、ベトナムでは VAC System と呼ばれており、多くの地域で見られる慣行的なシステムである。（鈴木俊「途上国はいま」p.109）



アルコナーダ氏と我々のために新築してくれたコテッジ風ゲストハウス



同氏の家の敷地から見た水田とヤギ小屋（水田の向こう側の丘）



同氏の家の敷地からバナナ林をとおしてみた水田



同氏の養魚池と我々のためにココヤシの実をとる友人達

5) エルモル T. ファニータス (Elmor T. Juanitas) 氏の事例

1) 在住村落 (Balangai Bololacao) の概況

同氏はネグロス島の西ネグロス州バコロード市から東におよそ2時間走ったムルシア (Murcia) のミノヤン村 (Branguay Minoyan) に住んでいる。ネグロス島は首都マニラ (ルソン島) から南に空路およそ1時間に位置するパナイ島 (Panay) から高速船で西に1時間余の距離にある。ミノヤン村はバコロード市郊外のなだらかな丘のサトウキビ畑の広がる中をかなり走った後、山に登り始めたところに位置する農村で、近くに温泉の湧き出る保養地もある。同村の人口はおよそ10,000人、1,760戸である。人口の80~90%は農業とかかわりを持ち、主産物はサトウキビ、米・切花および畜産物である。

2) 農業経営の概況 (農業研修前後を比較して)

同氏は、1998年に大学を卒業した (農業関連産業学士: BS Agribusiness) 後、子供の頃からの手伝いは別として、24歳の時から農業を始め、26歳の時 (2000年) に日本における農業研修を体験している。帰国後は、その経験を生かした農業経営を実践中で、現在34歳である。家族は同氏の外、妻 (33歳)、長男 (4歳)、長女 (1歳半?) ならびに両親 (父: 62歳、母 60歳) の6人で構成されている。

表1は同氏の農業経営について、日本研修前後に分けて比較したものである。まず、研修前についてみると、経営面積1.95haのうち、切花1.4ha、野菜0.05ha、バナナ0.5ha、畜産では養鶏 (採卵用) 50羽、牛2匹、養魚400匹であったものが、研修後においては、

表1. エルモル ファニータス氏の研修前後の農業経営比較

研修前の経営状況 (2000年1月) 応募時		現在の経営状況 (2011年2月)	
主な作物、家畜名	栽培面積、頭羽数	主な作物、家畜名	栽培面積、頭羽数
切花	1.4ha	米	0.5ha
野菜	0.05ha	切花	1.0ha
バナナ	0.5ha	トウモロコシ	1.0ha
養鶏 (採卵用)	50羽	養豚 (繁殖用)	55匹
牛	2匹	(子豚生産)	(1,000匹/年)
養魚	400匹/年		
総面積	1.95ha	総面積	2.5ha
年間所得概算	10万ペソ	年間所得概算	30万~35万ペソ

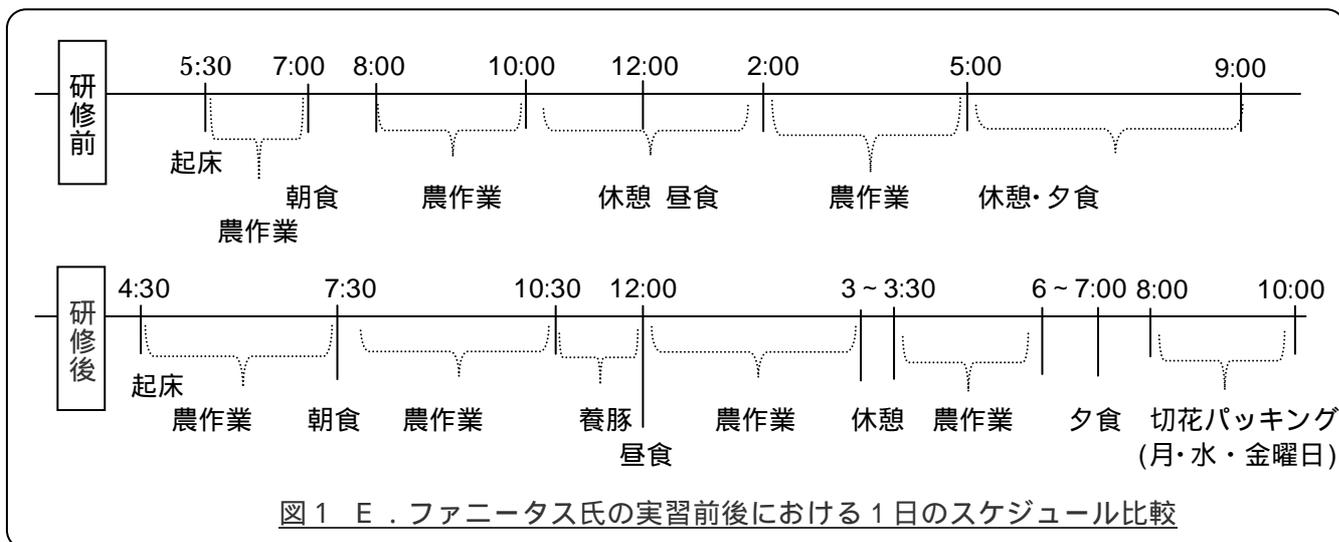
稲作0.5ha、切花1.0ha、トウモロコシ1.0ha、養豚 (繁殖用) 55匹 (子豚生産年間およそ1,000匹) に拡大し、農地面積も0.55ha拡大している (ただし、1haは借地)。生産物は、切花、子豚、トウモロコシを100%出荷するが、米は全て自給用である。これらの出荷方法は、子豚 (45日間育成し10kgで出荷) については農協を通じて、切花とトウモロコシについてはマーケットに直接出荷している。所得についてみると、同氏は2007~2010まで村長を務めており (現在は村会議員) 農業所得と農外所得の比率はおよそ70%、30%

というところから、同氏とのインタビューの内容を総合すると、少なく見積もっても研修後(最近)のそれを 30~35 万ペソと見積もることができよう。なお、同氏の研修前における農家所得は 10 万ペソほどであったという。

ここで、同氏の経営の特徴をみると、同氏の居住地は山の中腹にへばりつくように住宅が建てられた、集村形式の農村で農地はすぐ近くには確保される環境ではない。したがって、村人は集落から谷を一つ隔てた別の丘に農地を持っている。同氏の農地はオートバイで 15~20 分ほど離れたなだらかな山の斜面にある。ここにはサトウキビやトウモロコシも作付けされており、一見素晴らしい開けた耕地に見えるが、およそ 60 年前に発生した近くの山の噴火により、火山弾(中には一抱えもある)が埋まっており、耕すたびに石が出てくるという特殊な土地である。同氏はここに事務所と豚舎とその世話をする労働者の宿舎を設け、その周りにトウモロコシと切花(一部)生産を、さらに、より標高の高い山の近くの土地に経営の主力である切花専用の圃場を設けている(悪天候のため車での訪問が不可能であった)。

3] エルモル ファニータス氏のデリースケジュールの変化(研修前後比較)

次に同氏の一日のスケジュールについてみる。図 1 は、同氏の日本研修の前後を比較したものである。この図から、研修以前のそれを見ると 5:30 に起床し、1 時間半の食前作業と朝食とその後 11 時までの農作業、11 時以降の昼食と休憩の後の 2 時から 5 時までの農作業となっており、一日を通じて僅かに 6 時間半の労働時間となっていた。しかし、研修後のそれを見ると、4 時半に起床し朝食を挟んで 12 までの労働時間と、12 時の昼食後から休憩なしの 3 時までの労働、その後 30 分休憩して 3:30 から 6 時までの労働で、夕食は 6 時以降となっている。一日の労働時間を総合すると、11 時間余(さらに 1 週 3 日間は夜 8 時以降に対応しなければならない切花のパッキングのための 2 時間の追加労働)となる。以上の把握から、労働時間は研修前後を比較して、2 倍余となり、起床時間も 1 時間早まり、就寝時間についても、週 3 回は、10 時以降となる。この結果から、経営への責任と熱意並びに労働意欲の高揚を見てとることができよう。



4] 農業経営への活用状況

先ず、経営規模の変化についてみると、研修前の 1.95ha から 2.5ha へと規模拡大し、切花を少しおさえて、トウモロコシ 1ha と自給用の稲作 0.5ha を新規に作付けしている。また、養鶏と養魚を取止め繁殖豚 55 匹（年間 1,000 頭の子取り）に切り替えている。豚舎から出る厩肥はトウモロコシや切花に十分供給されていることはいうまでもない（同氏は切花の有機栽培により、「切花に関する現場科学者（Farmer Scientist for cut-flower）」としての資格を与えられている^{注1)}）。

農作業の機械化については動力噴霧器と揚水ポンプを導入しており、一方新技術の導入状況についてみると、日本研修で修得した施肥法並びに切花の収穫後処理技術、パッキング方法を取り入れ、また切花そのものについても日本から菊を導入（他の農家へも普及済み）している他、切花類の新品種の導入も推進している（セブ島など他の島の研修仲間が導入したものを導入）。この他、農産物の販売システムに関しては、出荷計画を立て栽培するように心がけている。

次に作付体系の改善についてみると、図 2 に示すとおり、研修前のそれは、切花を年 3 回植え付け 4 ヶ月で収穫していた。帰国後の切花については、ユリなどの種類によっては以前と変わらないが、極楽鳥花や葉物のクロトン等は周年栽培となっており、また養豚〔繁殖用〕も周年の飼育であることは言うまでもない。一方自給用の稲作については灌がいによる年 3 回の作付となっている。なお、米の収量については、最も収量が高い期は 12 月に収穫する第 3 期の作付のもので、多い時には籾で 42~45 カバン（1.9 トン：1 カバン 42kg）の収穫が見込まれ、一方、3 期を通して最低は 35 カバン（1.7 トン）以下の時もあるという。

一方、農業関係組織への加入状況についてみると、同氏はラ・カステリアナ協同組合（La Castellana Multi-purpose Cooperative:1992 年設立・組合員およそ 1,000 人）に加入し同組合を通じて一部農産物を出荷している。

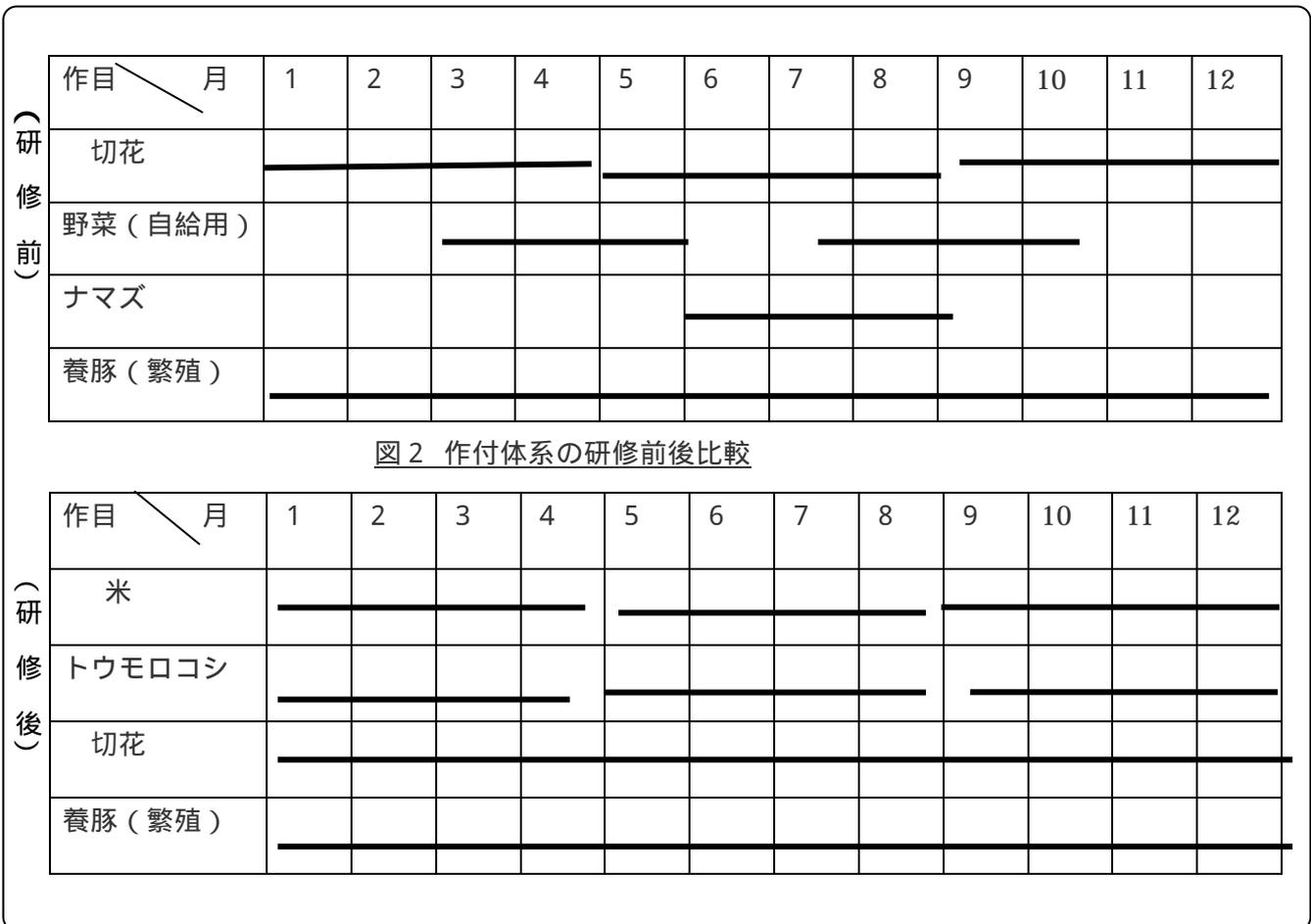
次に、同農場の労働投下量の変化についてみると、研修以前は家族労働中心（2 人）の他に、常雇 2 人での経営であったが、最近では切花に 2 人、養豚に 2 人の常雇 4 人と本人となっている。このことから、地域に対して 4 人ではあるが所謂「就労機会創出機能」も担っていると言うことができよう。

以上の把握から、切花については、以前のおよそ 50%増産が実現され、また質的には茎の長い、花の部分が大きい切花生産が可能となり出荷しやすくなっているという。またこれにより所得向上を実現している。なお、同氏は所得の向上により、妹と弟の大学経費を負担して教員に育てている。

5] 生活規範への影響（研修前後を比較して）

生活規範への影響については 計画的・時間の使い方（省時間的） 合理性・コスト意識（効率的） 自立心・自己確立、 忍耐力、 語学力、 友人獲得、 異文化交流・相互理解・国際協力への関心・理解、 愛国心・民族意識、 その他について、質問を用意した。面接の結果、どの項目にも肯くことができるとしながらも、特に の時間の使い方（Time Management）と の友人獲得、そして、 その他では、資金のつかい方について指摘している。すなわち、以前はかなりルーズにつかっていたが、研修後はより慎重な

つかい方に変わったと述べている。



6] 帰国後の地域社会への貢献および活動状況

同氏の地域社会への貢献については次の通りである。すなわち、2000年から2007年まで村議会の議員を務めていたが2007年から2010年までは同村の村長として活躍していた。一方、2007年には多目的協同組合（Multi-purpose Cooperation）を切花生産仲間（25人）と組織し、生産と販売に取り組んでいる。また、農業後継者の育成の一環として、農民青空学校（Farmers' Field School:FFS）の講師として、また、4-Hクラブの指導にも協力している。この外、近隣の農家に対して前述の「生産現場の科学者：Farmer-scientist」として技術指導に努めている一方、村レベルの人工授精士（Insemination Technician in Balangay level）の資格を取得して頼られる存在となっている。この外、日本向けJAEC研修生の事前訓練をも引き受け実施している。

7] 同氏の農業・地域活動等に対する評価

これまで述べてきたとおり、同氏の農業並びに地域に対する活動は高く評価されており、一方同氏の生産する切花の品質の良さと、生産現場にける技術レベルの高さは一般に認められているところであり、同村の村長や、「生産現場の科学者」として評価されている。先にも述べたとおり、この審査は農業省を中心とするメンバーから成る委員会による、書類

審査ばかりでなく生産現場を訪問審査までする極めて厳しい評価の結果認定されるものである。なお、同氏は、日本研修の帰国時に感想として「この研修から修得したことを自分の農場で応用して、周りの人が私のやり方のまねをしたくなるような素晴らしい農場になるように努力したい。自分が日本で学んだことを他の農家にも教えたいと考えている」と記している。

以上の把握から、同氏のこれまでの活動に対する評価は、村議会議員や村長への期待は勿論、25名の切花組合員の同氏を中心とする活動への期待などから考えて、高い評価を得ているものと判断されよう。

8] 研修事業に対する本人の評価（今後の研修事業の効果を高めるための提言）

最後の質問として、研修事業に対する評価や意見を求めた。この質問に対して、次の3点がかえてきた。

研修は素晴らしいものであった。

日本の農業協同組合についてもっと勉強したかった。

最近の日本の農業について学ぶ機会を創って欲しい。とくに、「生産現場の科学者」のような、地域で指導的な活動をしている者にとっては最近の日本の農業を勉強したい。

注1): 同国の JAEC 農業研修生OB総数は、342人を数え、この中40%が Farmer Scientist だという。40%というと、実数で、137人である。これらのOBが、「生産現場の科学者」（わが国の指導農業士と同じものか）ということで、それぞれの地域で農業技術指導に貢献しているということは、まさに期待どおりの素晴らしい実績を上げていると評価すべきであろう。なお、審査に当たっては PCARRO(Philippine Council for Agricultural Resource Research Development: Dept. of Agra. と Dept. of Science & Technology および、DENR: Dept. of Environment & Natural Resources, State Colleges & University: University of the Philippines, Central Philippines University, Aklan State University からの委員で構成されたメンバー)と、WESVARDEC(Western Visayas Agricultural Research and Development Council)のメンバーにより、現場における評価まで実施した後決定するという厳しい審査であるという。



昨年まで村長を務めていたエルモル ファニータス氏と彼の切花園



同氏の栽培する切花（テッポウユリと葉物）



ホストファーマーに説明中の同氏



同氏の豚舎と繁殖用母豚

6) アルトゥーロ R. アウト (Arturo R. Awat) 氏の事例

1) 在住村落 (Balangai Bololacao) の概況

同氏は首都マニラから北に車でおよそ3時間走ったタルラック州 (Tarlac) ラパスのリサール村 (Barangay Rizal) に住んでいる。リサール村は平野の中に開けたあまり起伏のない静かな村で、280戸、800人の人口を擁している。村人のおよそ80%が農業に従事し、主産物は米、緑豆、ソルガムである。

2) 農業経営の概況 (農業研修前後を比較して)

同氏は、高校を卒業後から農業に取り組み、25歳の時 (1991年) に日本における農業研修を体験し、その経験を生かした農業経営を実践中である。現在、44歳で、妻 (32歳)、長男12歳と両親 (父: 67歳、母58歳) の5人家族である。

表1は同氏の農業経営について、日本研修以前と以後に分けて比較したものである。まず、研修前についてみると、経営面積4.5haのうち、稲作3.5ha、緑豆1.0haであったものが、研修後においては、稲作5.5ha、緑豆2.5ha、果樹 (マンゴー) 1.0haとなっている。なお、マンゴーの新植した畑に野菜類 (ナス、オクラ、ニガウリ、十六ササゲなど) も作付けている。したがって、経営面積は、4.5haから9haに拡大しており、これに伴い、以前は同氏と父親だけの労働力であったものが、現在は6人を雇用するまでにいたっている。一方、所得についてみると、研修以前は60,000ペソであったものが、今年のそれは460,000ペソと8倍近く増加している。

表1 アルトゥーロ アウタ氏の実習前後の農業経営状況比較

研修前の経営状況 (1991年1月) 応募時		現在の経営状況 (2011年2月)	
主な作物、家畜名	栽培面積、頭羽数	主な作物、家畜名	栽培面積、頭羽数
米	3.5ha	米	5.5ha
緑豆	1.0ha	緑豆	2.5ha
		果樹 (マンゴー)	1.0ha
耕地面積	4.5ha	耕地面積	9.0ha
年間所得概算	60,000ペソ	年間所得概算	460,000ペソ

また、農業機械の導入も進めており、これまで表2に示す各種の機械類が導入されている。

表2. 研修後に導入した農業機械類

ハンドトラクター: 1台	ロータリー: 1台
揚水ポンプ: 1基	脱穀機: 1台
噴霧器: 1台	

次に、新技術の導入についてみると、上記の農業機械の他、有機農法の導入、マンゴーの新品種 (Moncotting種: タイから) の導入などがある。これらにより、作業の季節的推

移へのスムーズな対応と省力化や、有機農法の導入による化学肥料の削減（それまで化学肥料をヘクタール当たり8～10袋施用していたが、現在では2袋に留めるところまで改善している）などを指摘することが出来る。これらの結果として、米の収量が以前にはよい時点で1作4トン/haであったものが現在は5トン/haに増加し、品質もよくなっており（有機農法による味の改善）これに伴って販売が容易になってきたという。なお、同氏の生産した米は、以前には家まで買いに来る仲買人に売り渡していたが、現在は同氏が米の「卸しと小売許可証」を取得したため、米販売の店舗を設け、また四輪車を所有して直接消費者に販売している。

一方農業情報の収集、友人・仲間の獲得についてみると、同氏は、農業関係の会合には積極的に参加するように心がけており、年間少なくとも10回以上は参加し新情報の収集と友人・仲間づくりに努力中であるという。

以上の把握から、研修前後を比較すると、経営規模の拡大、新技術の導入（農業機械類、作物・品種、栽培法等）、地域労働力の雇用・吸収機能、販売部門の併設など、農業経営（関連部門を含めて）を積極的に推進している様子が伺われよう。

3] アワタ氏のデリースケジュールの変化

次に同氏の一日のスケジュールについてみる。図1は、同氏の日本研修後（調査時点）のデリースケジュールである。この図から、4時の起床の後の食前作業が6時までとなっており、その後の朝食と、朝食後11時までの作業を加えると、午前中の労働時間が6時間余となる。午後のそれを見ると、12時から2時までと、3時から8時までの7時間の労働時間で、1日の労働時間の合計は13時間余となる。残念ながら研修前のデリースケジュールについては、既にかなり以前の記憶のため、はっきりと覚えていないという同氏の事情と、筆者らの時間の制約のため聞きだすことができなかった^{注1)}（同氏は今とほぼ同じであったが、米穀販売をしていない分だけ少なかったという気がするとのことであった）。したがって、研修前後についての比較は出来ないが、同氏の現在のデリースケジュールから推察して、かなり多忙な毎日であったろうことは推測される。帰国後に導入した販売部門の併設もあり、労働時間を見る限り研修以前より明らかに増加していると見ることができよう。同氏に対する聞き取り調査を進める中で、同氏の同日の仕事への配慮が伝わってきた。

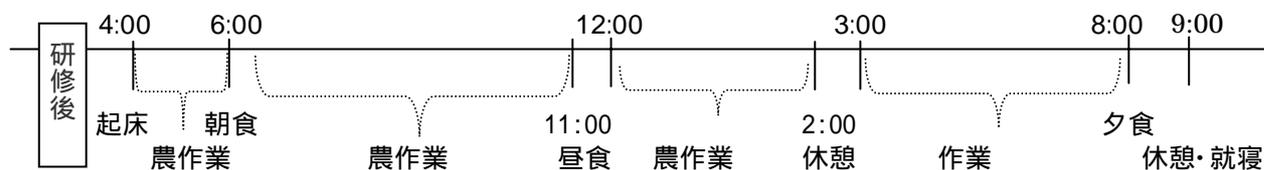
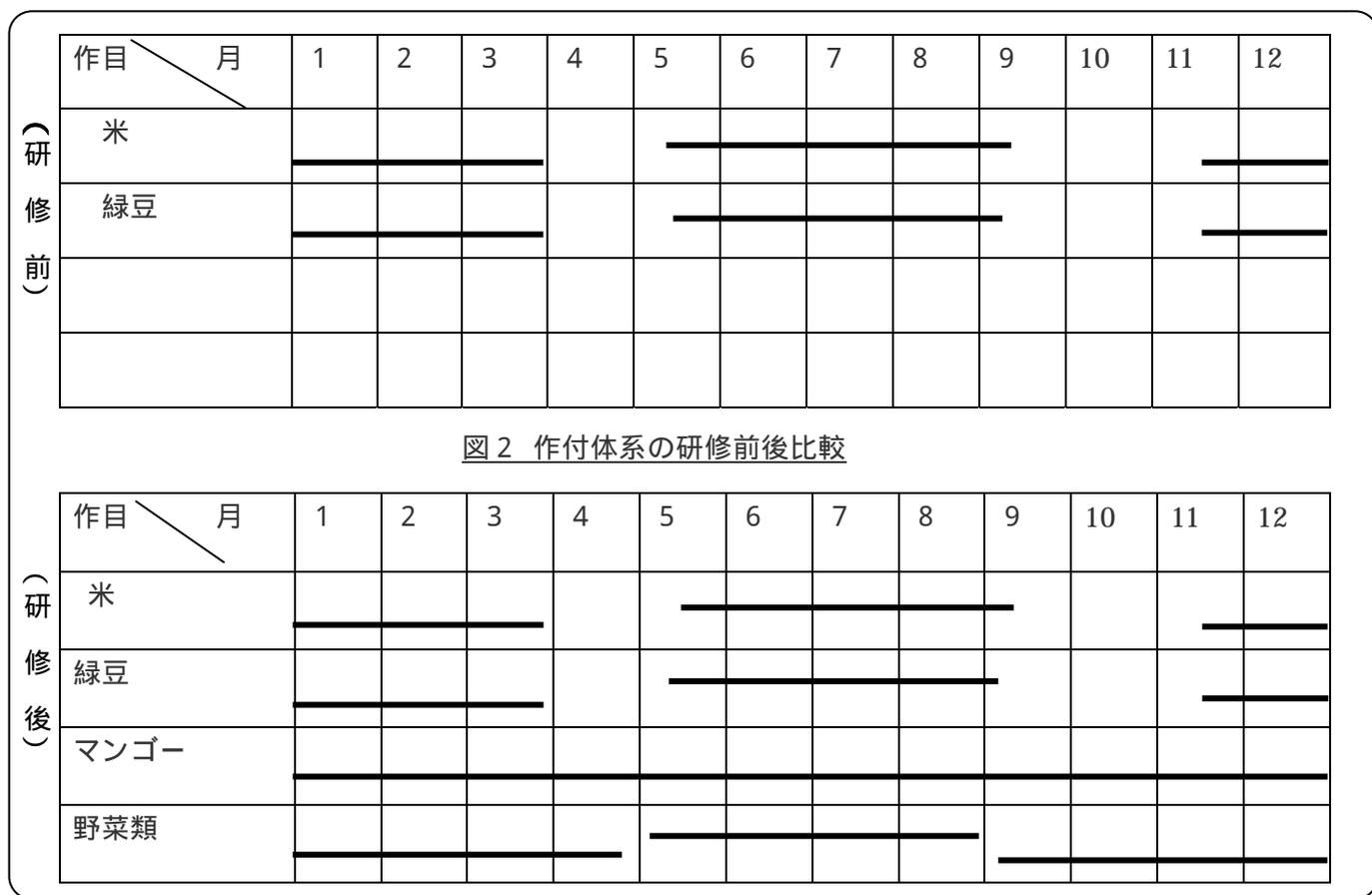


図1 A. アワタ氏の研修後における1日のスケジュール比較

4] 農業経営への活用状況

まず、経営規模の変化についてみると、研修前の4.5haから9haへ規模拡大し、それまでの稲作に加えて緑豆の作付けの拡大と果樹（マンゴー）生産を加え、一方では米の卸しと小売事業を始め、また農作業の機械化を推進するなど、積極的な経営改善を進めている点は見逃せない。また、これら機械化や新作物導入の他に、先にも触れたとおり、有機農法の導入と化学肥料の削減を推進しているなどの点をあげることができる。

次に作付体系の改善についてみると、図2に示すとおり、研修前のそれは、稲の2期作（収穫：9月と3月）を中心に緑豆（収穫：9月と3月）を稲作と同時期に作付ていたが、研修後においては、マンゴー（収穫期は2～4、7～8月）が加わっている。なお、マンゴーについては旧来の品種からタイ種の導入により今後の期待が寄せられている。ことに同地は毎年台風の被害を受けるため、マンゴーの仕立て方も、2本の苗木をおよそ20センチ間隔で寄せて植え、地上40～50cmで束ねて1本の木に成長するように工夫した、強風対策を構じた方法がみられた（新技術の導入にはかなり積極的である点がうかがわれる）。



一方、農業関係組織への加入状況についてみると、今のところ農業関係の組織には加入しておらず、同氏の独自の発想・考え方を重視した経営（技術・知識、情報は大いに収集するが、単独での出荷・販売などの方法で実施）を心がけている。

次に、同農場の労働投下量の変化についてみると、先に記したとおり、以前は家族労働中心（同氏と父親の2人）であったが、現在は6人を常雇とするまでにいたっている。

5] 生活規範への影響（研修前後を比較して）

生活規範への影響については、計画的・時間の使い方（省時間的）、合理性・コスト意識（効率的）、自立心・自己確立、忍耐力、語学力、友人獲得、異文化交流・相互理解・国際協力への関心・理解、愛国心・民族意識、その他、について質問を用意した。面接の結果、の自立心との民族意識以外は、少なからぬ影響を受けたという回答で、ことにの計画的な時間の使い方の必要性和、のコスト意識について大いに影響された点を強調している。また、のその他については、以前は自分自身に自信がなく、不安を感じるが多かったが、研修を通して自分に自信がついた、と述べている。

6] 帰国後の地域社会への貢献および活動状況

同氏は出発前の農業研修生に対して、事前研修を引き受け協力している。

7] 研修事業に対する本人の評価（今後の研修事業の効果を高めるための提言）

最後の質問として、研修事業に対する評価や意見を求めた。この質問に対して、次の2点が返ってきた。

日本研修は大変有意義な研修であった。

研修生が、全て希望の業種の受入農家に入れるように対応して欲しい。（これは自分の経験ではなく、自分の知っている研修生の経験を述べたものである）

注1]: 2月5日のルソン島に戻って来てから最後（帰国前日）の農家訪問の途中で、道路の渋滞に巻き込まれ、マニラから北におよそ3時間走ったところで目的地に行き着けないことが明らかになった。我々はこの時点で調査予定の農家をキャンセルして、日帰りが可能な、その近辺のOB農家に対象を変更した。この結果、同氏を突然訪ねることになってしまった。本来ならば、研修終了後5～6年経過したOB農家を調査対象としていたのがあるが、同氏は研修後20年を経過した農家であった。したがって、これまで調査した5戸のOB農家と異なり経営も安定した農家であった。一方、同士には予定にない対応を強いてしまったので、その日の多忙な日程を狂わせる結果となってしまった。したがって、同氏は準備のないままインタビューに対応しなけりなかつた。これらのことから、この調査は突然訪問し聞き取りをしたため十分に時間をかけることができなかつた。したがって、調査結果に不足分が生じているのはこの理由によるためである。なお、突然の訪問で同氏には大変迷惑をかけてしまった。ここに改めてお詫びと御礼を申し上げる次第である。（しかしながら、メリットとしては、突然の抜き打ち調査であったため、なんら恣意的な意志が働いていないという長所はあろう。）



アルトゥーロ・アワタ氏と彼のマンゴー園



同氏の水田と揚水ポンプ（後方はマンゴー園）



マンゴーの寄せ植え仕立て中の幼木



同氏が取得した「穀物卸し並びに小売許可証」

調査結果並びに提言

1. はじめに

これまで、研修生OBに関する個別調査結果をみてきた。とくに本調査で留意した点は次の10項目である。すなわち、1) 経営面積の拡大、2) 作目の変化・改善、3) 生産量と質の変化、4) デイリースケジュールの変化・充実、5) 研修経験の農業経営への活用状況、(機械の導入、新作物の導入、作付体系の変化・改善等) 6) 生活規範への影響、7) 地域社会への貢献、8) 地域社会の研修生への評価、9) 本人の研修事業に対する評価、10) 研修事業改善のための要望、である。それぞれについてインタビューの結果を纏めると次のとおりである。

2. 調査結果

1) 経営面積の拡大

経営面積の拡大に関しては、帰国後の農業経営に携わる中で、これまで(出発前)の手伝いの立場(脇役)から、経営者(主役)の立場へ移行する者もあり、(時間の経過として当然のことではあるが、本人の結婚を機に、または父親の高齢化や死亡などにより)父親の農地を引き継ぎ、近隣の農地を借地または買収して少しずつ拡大している点が伺われる。(調査した6戸の農家を平均して3.1haの増加[最大5.25、最小0.55ha])

2) 作目の変化・改善

作目の変化・改善については、友人・知人をできるだけ獲得し、一方では農業関係の集会などに参加するように心がけ、農業情報の獲得と共有に勤める者が殆どである。この結果主食としての稲作は当然であるが、畑作では野菜、切花、スイカ、緑豆、サトウキビが、畜産では養豚、ヤギ飼育、セラピアからナマズ飼育へ、果物ではマンゴー等様々な作目(家畜)の導入と作付の改善がみられ、いわゆる商業的農業への対応と進展と見ることができよう。

3) 生産量と質の変化

生産量と質の変化については、新技術(農業機械・有機農業・新作物・家畜)の導入により、量的な拡大と質的充実(C.ドミンゲス氏の有機野菜の同国最大の量販店MSデパートへの出荷契約や高値での取引、E.ファニータス氏の有機農業による切花の、花のサイズや茎の長さによる高値出荷など)またこれによる所得の拡大が見られる。(ちなみに、調査した6戸の農家を平均して26.2万ペソの増加[最大52万ペソ、最小4万ペソ])

4) デイリースケジュールの変化・充実

デイリースケジュールの変化・充実については、全ての研修生OBが以前に比較してより充実し効率的な日々を過すようになり、起床から就寝までの時間を有効に活用していることが判明した。6)の生活規範への影響の中で、計画的時間の使い方(省時間的)や、合理性・コスト意識(効率的)、自立心・自己確立、忍耐力、などについて影響されたという回答が多かったが、まさにこれらの結果と結びつけることができよう。勿論これらの農家

は働き盛りの、しかも責任ある立場の年齢に達しつつあるということもあるが、農業経営についてのインタビューから、研修時に受けた様々な影響が言葉の端々にうかがわれたことは確かである（ホストファーマーも同行してはいたが）。

5) 研修経験の農業経営への活用状況（機械の導入、新作物の導入、作付体系の変化・改善等）

研修経験の農業経営への活用状況（機械の導入、新作物の導入、作付体系の変化・改善）については、規模拡大に伴う揚水ポンプやハンドトラクターの導入や、E.ファニータス氏のように、日本式の施肥法、切花のポストハーベスト技術やパッキング技術、日本から菊の導入と周辺農家への普及等々、およびこれらによる作付体系の改善など多くの物的・知的技術の導入活用が見られる。また、経営に関して、省時間、計画的なあるいは合理的な意識の芽生え、資金の有効利用や、経費節減などに関する、いわゆる費用対効果に関する意識、および共同化を意識するなど、経営者としての意識改善がみられる。

6) 生活規範への影響

生活規範への影響については、計画的・時間の使い方（省時間的）、合理性・コスト意識（効率的）、自立心・自己確立、忍耐力、語学力、友人獲得、異文化交流・相互理解・国際協力への関心・理解、愛国心・民族意識、その他、について質問した。これらの点は全ての研修生OBが多かれ少なかれ肯けるとして、～まで全員（6人）印をつけている。なお、「多かれ、少なかれ」と表現した意味は、研修生の持つ目標や期待、感受性とそのおかれた立場・境遇並びにその時（研修中）に生じた様々な問題によって受けた影響・感じ方の度合いが異なるということが分かったからである。

次に、それぞれについて具体的事例をあげ答えてくれた回答を記すと、については、時間の使い方や計画について、「スケジュールを書き出し、その中で最も重要なものから処理するようになった。」については、コスト意識について大いに影響を受けた。については、労働に対する継続心を身につけることができた。については、労働に対する持久力を身につけることができた。については、コミュニケーション技術として意識し、自己開発をすることに成功した。については、セミナーや大会などに参加し多くの友人獲得に繋がった、については、交流することにより、数々の有意義な事柄を修得することができるようになった。については、資金の使い方に慎重になれた、という意見と、家族を思いやる・大事にするようになった、の2点が記されている。

7) 地域社会への貢献

この質問については、有機農業が評価され、展示圃場として認定されて、月平均30人～50人の農家の現地視察を受け、説明者としての役割を果たしている。有機農業により、安全な食料供給機能を果たしている。地域の遊休労働力に対する雇用機会創出に貢献している、周辺農家の子弟に研修機会を与え、技術普及やアドバイスをしている。農産加工について4-Hクラブを通して推進している。近隣農村に対し、青年農業者の活動について紹介して同様な活動の推進を図っている。多目的組合のコンサルタントとして地域活動に参加し、地域の文化活動に積極的に参加している。村長や村会議員として地

域社会の指導的役割を果たしている。 FFS(農民青空学校)の講師を勤めている。 JAEC の実施する研修予定者に対する事前研修を引き受けている等々、地域社会への貢献をみることができる。

8) 地域社会の研修生への評価

地域社会の研修生 OB に対する評価について、フィリピン農業省はこれまでの研修生 OB の活動に対して、最優秀青年農業者(The Most Outstanding Young Farmer : 2006 年 1 人)として表彰をする一方、一部の者に「生産現場の科学者(Farmer-scientist)」の資格を与えている。これはわが国の「指導農業士」に匹敵するものと考えられるが、この資格を取得するためには p.31 に記したとおり大変厳しい審査を経なければならない。なお、この資格を受けた者はこれまで同国における JAEC 研修生 OB 総数 342 人中実に 40% に当たるといふ。まさに、本事業がフィリピンの農業並びに農村におけるリーダー養成に大きく貢献していることを証明する実績と見ることができよう。

9) 本人の研修事業に対する評価と要望

この件については、表現は別として、一様に有意義で学ぶことが多かったという評価をしており、具体的なものとしては、農業協同組合について学ぶことができた点を指摘している(もっと学びたかったという意見もある)。また、研修事業改善等のための意見・要望については次のとおりである。

研修期間の延長(折角日本の生活に慣れたと思った時点で帰国しなければならず、もう 1~2 ヶ月の間に大いに学ぶことができたのではないかと)。

研修生の人数を増加して欲しい(多くの青年に体験させたい)。

帰国後顕著な活動・実績を挙げているものに対し、日本側による表彰・顕彰などの制度を創設して欲しい。(受入農家に対する恩返しと、関係者への感謝の気持ち・思いを伝えたいということか)

地方研修(配属県における先進事例等のガイダンス、視察、交流)の日数を長く取って欲しい。

研修内容と分野の拡大。生産物のパッキングやマーケティングに関する研修の強化。

有機農業に関する研修の拡大と同農家への視察研修の拡大。

言葉の研修をもう少し長期で実施して欲しい。

ホストファーマーによる研修生訪問を実現して欲しい(この記述者は、ホストファーマーが今回の訪問に参加していなかった)。

農業協同組合についてもっと勉強したかった。(20年前のOB)

「生産現場の科学者」(わが国の指導農業士?)などの、地域において顕著な活動をしている者に対して、最近の日本農業について改めて学ぶ機会を創ってほしい。

3. 提言

これまでの把握から、同事業の目的は大凡において達成されているものと判断される。留意しなければならない点として指摘するならば、前述の9)の研修に対する評価・要望であろう。なぜなら、評価については予想された通りであるとしても、要望については検

討に値すると考えられるものも見られるからである。

ことに、帰国後顕著な活動・実績を挙げている者に対して、日本側による表彰・顕彰などの制度を創設して欲しい、という意見に関しては、研修生 OB の受入農家に対する恩返しと、関係者への感謝の気持ち・思いを伝えたいという意味があるのではないかと理解された。また、ごく最近の日本農業について学ぶ機会を創ってほしい、という意見については、地域において際立った活動をし、農業・農村開発に関する問題意識を持ち、実際農業指導に携わってのような優秀な研修生 OB のリフレッシュメントを兼ねた短期間の招聘制度（15 日～30 日程度の期間でもよいので）については検討する価値があるものといえよう。

一方、新しい発見ではあったが、送り出す側のフィリピン政府としても、研修生 OB への期待と責任から、1986 年以来 JAEC 研修生 OB に対して再就農支援制度（Re-entry Assistance）を開始し、1 人当たり 2 万～6.25 万ペソの範囲でプロジェクトを設けていたことである。これは同国の JAEC 活動に対する期待と評価と受け取ることができよう。

今日、人口増加、食料問題と環境破壊および国際化が進む中で、農業分野においても、まさに農業・農業者・農村社会の国際化とこれらの問題への理解が真に求められている。農業・農業者・農村社会における国際化の課題は、農業分野における相互理解、国際協調、共存共栄を意識し、進展させることであるということが出来よう。これを是とするならば、途上国の青年農業者のわが国農村における農業研修ほど効果が期待できるシステムは他にないといえる。なぜなら、途上国の青年農業者がわが国農村社会において、農家の一員となって寝食を共にし農作業に従事することは、その青年をしてわが国農村・農家・農業など全てに対し単にわが国風土への順応や、農業技術・知識の吸収ばかりでなく、異質な文化、生活規範、価値観などに接し、驚き、比較し、考え、悩み、納得し、結果として多くのものを学び、一方では得がたい友人・知人（それはその人にとって一生忘れられない恩人とも親代わりとも成りうる）を得る機会を与えるからである。一方受け入れ側のわが国農村社会や農家にとっても、途上国の青年農業者から受ける新たな文化摩擦や、価値観、考え方などは、得がたい異文化間交流の機会となり、これらを通じて知り、学び、考えることが多いコスモポリイト（開明的）な機会となるからである。この結果として、国際化の課題に対する地域レベルからの解決策の一步としての相互理解や国際協調の必要性を、農家ばかりでなく、地域の人々が身を以って体験できる絶好の機会となり、また、共存共栄の何たるかを考え推進する大いなる一步となり得ると考えるからである。

同行したホストファーマーの皆さんが、かつての研修生に如何に慕われ、尊敬されているかは、行く先々で待っていてくれる研修生 OB の態度から十分汲み取りことができた。どの研修生も「お父さん」「お父さん」とかつてのホストファーマーを呼び、心を許し日程の許す限り同行してくれたことに少なからぬ驚きと嫉妬すら感じた。まさに、民間レベルの他に類を見ない国際協力（特に相互理解と協調を推進）の理想を目のあたりにした 1 週間であった。

以上のことから、本事業は、かつての海外研修経験者（それは、外国人農業研修生として、欧米において研修生の何たるかを全て体験し尽くした受入農家）の民間レベルによる、相互にとって極めて学ぶことが多く意義深い、そして両国にとってさらに有効な国際親善

と協調を担う相互協力であり、物の贈与や建設や、現地への人材派遣などには見られない、しかも費用対効果の極めて高い（実際は受入農家の多大な好意に甘えてはいるが）国際協力の一形態であるとの認識を新たにした。

終わりに、現地においてお世話を戴いたフィリピン農業省ならびに関係機関各位、忙しい時間を割いて協力を戴いた農家の皆様に厚くお礼を申し上げます次第である。またご協力戴いた同行のホストファーマーの皆様にも厚く御礼を申し上げます次第である。